長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆「少女」「玉鬘」昌倪筆「初音」八幡田中殿筆「胡蝶」

長谷川　端（文責）　駒田貴子
村井俊司

解　題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』[1]各一冊の中の岡本主水筆「少女」「玉鬘」、昌倪筆「初音」、八幡田中殿筆「胡蝶」である。

「少女」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央部に水面に浮かぶ三羽の水鳥と水紋を描き、その下部に水際の岩とそこに生える草を配した下絵に「をとめ」と墨書きする。全丁数は五十九丁、墨付五十八丁、遊紙前一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二〜二十九字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「玉鬘」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、上部から下部にまで五つ波状の文様を描いた下絵に、「玉かつら」と墨書きする。全丁数は四十八丁、墨付四十七丁、遊紙前一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は三〜二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「初音」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、上部に銀で渡り鳥の二つの群れを配し、下部には金の二つの稲群とそれを囲むように草を朱で描いた下絵に、「はつね」と墨書きする。全丁数は二十丁、墨付十七丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十

行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は四〜二十三字、字高は十九糎。奥書、識語はないが、後ろの遊紙の一枚目に小字で「公條公　法名仍覚」という、本書が三条西家の本との関係が窺える記載がある。

「胡蝶」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、金で雲、銀で川面、朱で草を配した川の景の下絵に、「こてふ」と墨書きする。全丁数は二十九丁、墨付二十八丁、遊紙前一丁。内題はなく、一面十行、和歌は三丁表裏のみ一首を二行に書き、それ以外は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は四〜二十六字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺[2]」、玄陳筆「帚木[3]」「関屋[4]」、玄的筆「空蝉[5]」、岡本主水筆「夕顔[6]」「若紫[7]」「賢木[8]」「明石[9]」「澪標[10]」「蓬生[11]」「薄雲[12]」「橋姫[13]」「手習[14]」、石井了倶筆「末摘花[15]」、西山宗因筆「紅葉賀[16]」「宿木[17]」、左馬助筆「花宴[18]」、東寺観智院筆「葵[19]」、北左平次行生筆「花散里[20]」、大鳥居信岩筆「須磨[21]」、宗琢筆「絵合[22]」、玄仍息女筆「松風[23]」、伴与九郎紀金筆「朝顔[24]」は既に解題を付し翻刻した。

二、書写者の昌倪と八幡田中殿

「初音」を書写した昌倪については、『寛政重修諸家譜』[25]巻第千二百九による次の系図から、

仍景（昌叱）
- 景敏（昌琢）
  - 景益（昌程）
  - 景則（昌通）叔父景次が養子となる。
- 景次（昌倪）連歌師たり。
- 女子
- 女子

父は昌叱（仍景）で、兄にこの『源氏物語』揃の巻頭「桐壺」を担当した昌琢（景敏）がおり、その兄の次男昌通（景則、後には祖白と称する）を養子としているとわかる。

没年は、三回忌、十七回忌の追善百韻が行なわれた年月日から明確となる。

承応二年七月十八日　昌倪法橋三回忌追善百韻

発句　しのぶ世に見もし見とや萩の庭

昌程十二・昌胤九・玄俊十・玄心九・昌陸七・了純八・了心九・宗俚九・昌親三・一仲七・昌村七・程白九・

執筆一（句上に「昌村」を「昌林」。「執筆」を「元覚」と記す。）

寛文七年　法橋昌倪十七回忌百韻

発句　とふや我おもひの花の草の原

昌隠百（点、昌程）

この二つの回忌の記載から、昌倪が没したのは、慶安四年（一六五一）七月十八日で、享年、六十四歳であり、天正十六年[26]（一五八八）から、この慶安四年（一六五一）七月十八日迄がその生涯となる。それを里村家の人々の動向等も加え年表にすると、次のようになる。

年号	歳	記事
天正　二年（一五七四）		兄、昌琢出生。
十六年（一五八八）	1	出生。
十九年（一五九一）	4	甥、玄陳出生。
文禄　二年（一五九三）	6	甥、玄的出生。
慶長　四年（一五九九）	12	小珍（丸）として出座。
七年（一六〇二）	15	祖父、紹巴没。
八年（一六〇三）	16	父、昌叱没。景次として出座。
十五年（一六一〇）	23	昌倪として出座。
十七年（一六一二）	25	甥、昌程出生。
元和　元年（一六一五）	28	甥で養子となる昌通（祖白）出生。

寛永十三年（一六三六）　49　兄、昌琢六十三歳で没。
慶安　四年（一六五一）　64　七月十八日没。
承応　二年（一六五三）　七月十八日、三回忌追善百韻連歌。
寛文　七年（一六六七）　十七回忌追善百韻連歌。

この昌俔の生涯で注目したいのは、十五歳で祖父、紹巴が亡くなり、翌年、十六歳の時に父、昌叱が没している点である。そのため父、祖父に代わり昌俔の後見をしたのが、十三歳年長の兄、昌琢だと考えられ、この家庭環境による昌琢の存在の大きさを、まず留意しておきたい。

次に、この書写が行なわれた、寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）の間の昌俔が連衆となっている連歌会を取り上げ、連歌師としての足跡を見ておきたい。『連歌総目録』[27]から、昌俔の名前が見られる連歌会を抽出し、この『源氏物語』揃の書写者と、題簽を書いた八条宮智仁親王の出座状況も加えたのが、以下の表である。

年	月　日	昌俔	八条	昌琢	玄陳	玄的	了俱	行生	宗順	伊益	能円	宗因	玄仲	能通
寛永元年（一六二四）	一月　三日	○		○	○	○	○	○	○			○		
	一月二十一日	○	○	○	○	○	○		○					
	八月二十八日	○		○	○	○		○				○		
	十月　十八日	○		○	○	○				○				
	十二月　十八日	○		○	○	○				○				
二年（一六二五）	一月　三日	○		○	○		○	○				○		
	一月二十一日	○	○	○	○	○	○		○					
	三月　三日	○	○	○	○		○		○					

					四年（一六二七）													三年（一六二六）							
四月七日	四月五日	三月十八日	三月十八日	三月	一月三日	十月九日	十月七日	十月五日	九月晦日	九月十六日	九月八日	七月十日	四月十二日	三月十日	二月二十六日	一月二十一日	一月三日	一月	十月二十二日	八月十五日	八月十四日	五月晦日	四月		
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
				○		○								○		○		○			○				
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○			○		
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		
○	○		○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		
													○			○	○	○			○	○			
		○	○		○				○		○				○				○				○		
		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○		○		○		○		○		
																						○			
			○		○			○	○	○					○				○						
													○										○		

										六年（一六二九）									五年（一六二八）				
	十一月二十二日	十月　晦日	十月　九日	九月　十八日	九月　十八日	九月　十五日	九月　十一日	八月　十二日	四月　一日	一月　三日	十一月　六日	十月二十八日	九月	八月　十日	七月二十九日	七月二十七日	七月二十三日	六月二十一日	五月　二十日	九月　六日	七月二十四日	七月二十四日
54	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11													○	○								
50	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47	○	○	○	○	○	○	○					○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	○	○	○	○	○	○				○		○		○		○				○	○	○
11																						
11																						
22																	○		○			○
5																	○			○		
1												○										
13															○					○		○
4														○							○	
1											○											

この表から、昌倪は、実兄の昌琢、甥の玄陳との一座が圧倒的に多いのがわかる。その昌琢は、宮脇真彦氏が[28]、

紹巴の後継者と目されていた玄仍が慶長一二年（一六〇七）、三七歳で早世したため、その後三〇年余連歌界第一人者の地位を保った。

というように、玄仍が没した慶長十二年（一六〇七）には、南北里村家を通しての年長者が昌琢で、この表の寛永の頃は、正しく「連歌界第一人者」、大宗匠という位置にあった。また、引用にある「三七歳で早世した玄仍」の嫡男が玄陳で、里村南家の当主である。この昌琢、玄陳との一座が多いというのは、昌倪が里村一族の家業である連歌を担う主要な一員としての姿を如実に示しているといえる。

表にある寛永元年（一六二四）から寛永六年（一六二九）の昌倪、昌琢、玄陳の年齢を掲げれば、昌倪が三十七歳から四十二歳、昌琢が五十一歳から五十六歳、玄陳が三十四歳から三十九歳であり、昌倪は兄である昌琢よりも甥の玄陳に年齢が近く、この年齢差から、やはり昌倪と玄陳が昌琢に随従して連歌会に参加していた様子が窺える。

その連歌会を通して昌琢は、幅広い人脈があったといわれる。奥田勲氏[29]は、

当時の貴顕僧俗のおよそ文事を好む人々すべてと交わった

といい、先の宮脇氏[30]は、

交友も、紹巴・昌叱の地盤を受け継ぎつつ、寛永期の智仁親王の連歌会への出座をはじめ、公家・大名・寺社関係者・上層町人らと広く交渉し、寛永文化の一翼を担った。

と指摘する。このような昌琢の人脈は、昌琢と共に連歌会に参加した昌倪にも多くの文化人との交流をもたらしたと考えられる。

その繋がりの一つとして、昌琢同様、寛永文化の担い手で『醒睡笑』の編者として知られる安楽庵策伝との交流が挙げられる。策伝に『策伝和尚送答控』[31]という自筆の書があり、その中に、

昌倪法橋　　伝

あかぬまの程そしらるゝ青葉にて見しを紅葉の色に出つゝ

返し

青かりしおりたにあるをつてにみる木陰ゆかしき庭の紅葉々　昌倪

という歌の贈答が見られる。昌倪の歌には、「庭の紅葉」とあり庭木を見ての詠歌である。庭木に関する歌としては、先に掲げた「三回忌追善百韻」の発句でも「しのぶ世に見もし見とや萩の庭」とあり、「萩の庭」が歌材になっていた。また、「十七回忌追善百韻」の発句では「とふや我おもひの花の草の原」という植物に関する景が詠まれていた。「草の原」という語句には、藤原俊成の有名な「源氏読まぬ歌よみは」という「花宴」の巻に関連した『六百番歌合』の判詞の内容も含まれるであろう。

この二つの追善百韻の発句で花や木が詠まれているのは、花や木の生えている場所が、昌倪を偲ぶ風景として記憶されていたためであり、昌倪が花や木草に愛着を持つていた様子が窺えるのである。

その昌倪の自邸の庭の椿について、これも策伝が著わした『百椿集』[32]という園芸書があり、その中に、

十六、侃ガ母

此一樹ハ、新在家ニテ連歌師昌倪ノ坪ノ内ニアリツルヲ、深ク望ヲカケ、囉ヒ畢ンヌ。赤キ色ノ小椿ナリ。花ノ開クヲ見レバ、更ニ蘂ナシ。

という記述がある。寛永期には椿愛好が盛んになり、策伝もその愛好家として、百種類の椿を収集した。その一

本が「侃ガ母」という名称の赤椿で昌俔邸にあり、それを懇望し手に入れたというのである。引用に続く部分で省略したが、そこに書かれている「侃ガ母」の名前の由来を含め、当該部分の内容については、森末義彰氏[33]の、

この頃御所の近くに新在家といわれる町ができ、連歌師やそのほかの芸能人などが住んでいたが、百椿集には、そこに昌俔という連歌師が居り、その庭にあったしべのない赤色の小椿が珍らしがられ、侃の母が自分の髪を切って酒の肴にしたという中国の故事にならって、それに「侃ガ母」という名を付けたとある。

という説明がわかりやすい。

そして、この中にある「新在家」は、鈴木棠三氏が[34]

新座池とも書く。烏丸通と東洞院との間、出水と長者町との間の地をいう。宗祇が住んで以来連歌師の住居が多かった。

と記すように、現在の京都市上京区の地名であり、この記載によって昌俔の居所がわかるのである。

ここまで昌俔について見てきたが、そこから窺える「初音」を書写した頃の昌俔についてまとめれば、連歌の家である里村一族として多くの連歌会に名を連ねており、その昌俔出座の連歌会の殆どが昌琢と同座であった。つまり、昌俔の連歌活動には、常に兄、昌琢の存在が看取できるのである。更に、冒頭で触れたように、家族関係としても昌琢が後見をしていたと考えられ、昌俔の全てにおいて兄、昌琢の後援と影響が大きかったといえる。そうすると、この「初音」の書写も、当然、昌琢の采配によるといえるのである。

昌俔の書写した「初音」に続く「胡蝶」の巻の書写者は、「八幡田中殿」と『源氏物語筆者目録』[35]に記されている。この「八幡」とは、石清水八幡宮で、「田中殿」は、その別当家の一つである田中家の敬清である。

『石清水八幡宮史』[36]首巻「石清水八幡宮編年史」で、この『源氏物語』揃が書写されたと考えられる、寛永四

年（一六二七）から六年（一六二九）を含めた時期の「田中家」に関する記事を抜き出せば、

元和七年（一六二一）　五月廿四日　田中敬清ヲ法眼ニ叙ス
寛永二年（一六二五）十二月十八日　田中敬清ヲ権別当ニ補ス
寛永四年（一六二七）　正月十一日　田中敬清ヲ権少僧都ニ任ズ
寛永九年（一六三二）　二月　三日　田中敬清ヲ法印ニ叙ス
七月十四日　幕府田中敬清ニ本社造替ノ命ヲ発ス
八月十二日　田中敬清ヲ検校ニ補ス
十月十六日　伝奏広橋兼賢立柱上棟日時ヲ田中敬清ニ報ズ

となっており、これにより書写がおこなわれた頃の当主は「敬清」であるとわかる。更に、敬清以外に「田中殿」と呼ばれる人物がいないか家系を確認すると、父、秀清は敬清が十九歳の元和五年（一六一九）には、既に没しており、敬清の跡継ぎである養子の召清は幼少で、実子、要清はまだ生まれておらず、この点からも「八幡田中殿」と呼ばれるのは、敬清しかいないといえる。そして、この「胡蝶」の書写年代を、敬清の年齢にあてはめると、二十七歳から二十九歳となる。

敬清の出自については、『石清水八幡宮史』[37]首巻「祠官系図」に、

異本、童名清松丸、母上池法印女
秀清次男、師主青蓮院尊純、慶長廿年七月八日、出家、十五歳、同日、任大法師、元和七年五月廿四日、叙

法眼、寛永三年十二月十八日、任権別当、同四年正月十一日、任権少僧都、同九年二月三日、叙法印、卅二、同年八月十二日、補検校社務、同十年十二月廿八日、被勅許香染並裘袋、同十三年二月五日（十、三、廿五イ）、転任権大僧都、同十七年八月十二（二イ）日、入滅、四十歳、社務九年。

とある。上掲の「石清水八幡宮編年史」と重複する部分が多いが、父は秀清、母は上池法印女で、寛永十七年（一六四〇）八月十二（二イ）日に、四十歳で没しており、慶長六年（一六〇一）から寛永十七年（一六四〇）までが生涯であるとわかる。

『連歌総目録』によると、敬清が連衆となっている連歌会はなく、連歌を通してこの『源氏物語』揃の書写を担っている昌琢を始めとする里村一族や、他の書写者との繋がりは確認できない。また、文芸に関する活動も見られない。

そのため、敬清の書写への参画は、「八幡田中殿」と「殿」をつけ敬称で記されている点を含めて、石清水八幡宮という朝廷、幕府から尊崇される社の別当家が書写者に加わっているという、この『源氏物語』揃の権威付けのためという、比重が大きいと考えられる。

三、本文のミセケチ・補入等

ここではミセケチ、補入等に着目して、今回翻刻した「少女」「玉鬘」「初音」「胡蝶」の四巻におけるその数を調べると、次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「朝顔」に「宿木」「橋姫」「手習」を加えた表も掲げた。

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
賢木	岡本主水	94	55	6	21	59	235
花散里	行生	2	2	1	1	4	10
須磨	信岩	34	33	11	55	84	217
明石	岡本主水	79	40	9	25	99	252
澪標	岡本主水	55	17	6	5	64	147
蓬生	岡本主水	71	28	5	6	14	124
関屋	玄陳	4	5	2	2	6	17
絵合	宗琢	51	26	2	0	30	109
松風	玄仍息女	4	0	4	0	0	8

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
桐壺	昌琢	2	7	0	1	47	57
帚木	玄陳	0	0	2	0	0	2
空蟬	玄的	0	1	0	0	0	1
夕顔	岡本主水	76	48	2	14	113	253
若紫	岡本主水	70	49	10	14	150	293
末摘花	了倶	2	0	1	0	0	3
紅葉賀	宗因	48	29	4	7	28	116
花宴	左馬助	7	3	1	10	2	23
葵	観智院	4	4	8	3	0	19

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
少女	岡本主水	134	35	5	13	60	247
玉鬘	岡本主水	93	26	13	8	55	195
初音	昌倪	7	10	6	14	30	67
胡蝶	八幡田中	53	17	9	4	27	110

巻	薄雲	朝顔	橋姫	宿木	手習
書写者	岡本主水	紀金	岡本主水	宗因	岡本主水
ミセケチ	90	57	101	22	120
補入	34	6	25	19	64
傍書	2	4	17	12	11
合点	15	11	10	0	18
朱点	55	18	49	0	143
総計	196	96	202	53	356

今回翻刻した四巻について見ると、「初音」は最終丁に「一校了・兼校了」と書かれ、また「胡蝶」は最終丁に「一校了」と書かれており、校合がなされているとわかる。その結果として、ミセケチ、朱点等が多く付されているのである。また、岡本主水の「少女」「玉鬘」には、校合をしたとの記載がないが、前掲の表にある主水担当の「夕顔」「若紫」等の巻には「一校了」という記載もあり、今回翻刻した二巻もミセケチ、朱点等の多さを見れば、校合がなされているといえる。

これらミセケチ、朱点等についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、校合をしたとの記載がある昌俱の「初音」と八幡田中殿の「胡蝶」と、ここでも岡本主水の担当した「少女」「玉鬘」には、ミセケチ等が多いという事実を確認し、留意しておきたい。

四、結語

三条西実隆の『実隆公記』[38] 文明十三年（一四八一）正月二日の条には、

昼間覧初音巻、佳例也

という記載がある。ここで「佳例」と書くように、同記の正月二日の記事に、「覧初音」という記述が幾つか見られる。

その「初音」の巻は、周知のように光源氏三十六歳の正月、六条院の女君達の許を年賀に訪れたという内容であり、巻名となる、明石の君が娘の明石の姫君に贈った、

年月をまつに引かれてふる人に今日鶯の初音聞かせよ

という歌は、「初音」に「最初の子日」も掛かり吉祥の意味合いが濃く、美術工芸品等の意匠としても用いられる。

徳川家光の長女千代姫が尾張徳川家に婚嫁した際に持参した「初音の調度」[39] 四十七点は、よく知られている。千代姫が尾張家二代徳川光友のもとに嫁したのは、寛永十六年（一六三九）であり、この『源氏物語』揃の書写された年代より少し下るが、同じ寛永期である。そうすると、寛永期にも「初音」の巻が、慶賀な巻であるという認識は、多くの人々が持っており、この『源氏物語』揃の書写で、「初音」という目出度い「晴」の巻を担当する昌倪は、書写者の中で看過できない人物であったといえる。

その昌倪は、前に掲げたように、この『源氏物語』揃の書写の中心人物である昌琢の唯一人の弟であり、里村

一族では、南家の昌琢、北家の玄仲に継ぐ年長者であった。そして、多くの連歌会に出座し、連歌師として知られる存在でもある。

このような昌倪の位置が、この『源氏物語』揃の書写では、複数の巻を担当する書写者が少ない中にあって、この「初音」と「御法」の二巻を受け持ち、「初音」という吉祥の意味合いが濃い巻の書写者に抜擢された理由だと考えられる。

「初音の調度」と並び称せられる千代姫の婚礼調度として、「胡蝶の調度」[40]十点もある。竹内順一氏[41]によると、現存の美術工芸品の意匠として取り上げられた巻としては、「夕顔」「初音」「胡蝶」の順だという。

「竜頭鷁首」唐風の船を浮かべた満開の桜の下での華やかな春を描く「胡蝶」の巻も、「初音」同様「晴」の巻であり、この巻の書写者は、多くの崇拝を集める石清水八幡宮の別当家の田中敬清であった。「八幡田中殿」と敬称が付いている人物で、特に書写を依頼したと考えられ、そのために「胡蝶」という慶賀な巻を割り振ったと思われる。

玉鬘十帖は、短い巻も多くこの石清水八幡宮の田中敬清のように、価値を高めるために書写者として名前を連ねて欲しい人物も見られる。冒頭の巻「桐壺」の書写者である昌琢を始めとして幾人かの書写者を見てきたが今回、石清水八幡宮の別当家が加わり、書写者の幅がより広がったといえる。今後、玉鬘十帖の書写者を考察すると、寛永の早い頃に、京都を中心に活躍した文人を更に多く網羅できるといえるのである。

翻刻凡例

一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
一、和歌は改行をし、二字下げとした。
一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
一、本文の傍書は原本通りとした。
一、補入記号がある場合は該当箇所に「〇」を付し、補入文字は右に記した。
一、漢字の踊字「〳〵」は、そのままとした。
一、本文の朱点は「・」で示した。
一、朱合点は、傍線で示した。

（をとめ）

年かはりて宮の御はてもすきぬれは世中
いろあらたまりて衣かへのほとなともいま
めかしきをましてまつりのころはおほかたの〇(空の)
けしき心ちよけなるに前斎院はつれ〳〵
となかめたまふ・おまへなるかつらのした風
なつかしきにつけてもわかき人〳〵は思いつる
事ともあるに大殿よりみそきの日はいか
にのとやかにおほさるらんととふらひきこえ
させ給へりけふは
　かけきやは川せの浪も立かへり君か御禊
のふちのやつれをむらさきのかみたてふみ
すくよかにてふちの花につけたまへりお
りのあはれなれは御返し(りウ)あり
　藤ころもきしはきのふとおもふまにけふは

1オ

みそきのせにかはる世をはかなくとはかりある
をれいの御めとゝめ給て見おはす御ふくな
をしの(ほ)ほとなとにもせむしのもとに所せ
きまておほしやれる事ともあるをゐんは
見くるしきことにおもほしのたまへとおかしやか
にけしきはめる御ふみなとのあらはこそとかく
もきこえかへさめ年ころもおほやけさまの(お)を
り〳〵の御とふらひなとはきこえならはし給てい
とまめやかなれはいかゝはきこゑ(え)もまきらかす
へからむともてわつらふへし女五宮の御方に
もかやうにおりすくさすきこえ給へは・いとあは
れにこのきみのきのふけふのちこと思し
をかくおとなひてとふらひたまふことかたち
のいともきよし(ら)なるにそへて心さへこそ人
にはことにおひいてたまへれとほめきこゑ(え)た
まふをわかき人〳〵はわらひきこゆこなたに

1ウ

2オ

もたいめんしたまふおりはこのおとゝのかく
ねんころにきこえたまふめるをなにかいま
はしめたる御心さしにもあらすこ宮もすち
ことになり給てえ見たてまつり給はぬなけ
きをし給てはおもひ立し事をあなかちに
もてはなれ給し事なとのたまひいてつゝ
くやしけにこそおほしたりしおり〳〵ありし
かされと故大殿のひめ君ものせられしかきり
は三宮のおもひ給はん事のいとをしさにとか
く事そへきこゆる事のなかりし也いまは

2ウ

そのやむことなくえさらぬすちにてものせ
られし人さへなくなられにしかはけになとてかは
さやうにておはせましもあしからましとうち
おほえ侍にもさしかへりてかくねんころにき
こえ給もさるへきにもあらんとなん侍なと
いとこたいにきこえ給を心つきなしとおほ
して故宮にもしか心こはき物におもは

はれてまつりてすき侍にしをいまさしに
又世になひき侍らんもいとつきなきことに
なむときこえ給てはつかしけなる御けしきなれ

3オ

はしゐてもえきこえおもむけ給はす宮人も
かみしもみな心かけきこえたれは世中いとうし
ろめたくのみおほさるれとかの御みつかしはわか心を
つくしあはれを見えきこえて人の御けしきのうち
もゆるかんほとをこそまちわたる給へさやうに
あなかちなるさまに御心やふりきこえむなと
はおほさるへし大殿はらのわか君の御元服の事
おほしいそくを二条院にてとおほせと大宮の

いとゆかしきにおほしたるもことはりに心〳〵
るしけれはなをやかてかの殿にてせさせたて

3ウ

まつり給右大将殿をはしめきこえて御をち
のとのはらみなかむたちめのやむことなき御

おほえことにてのみものし給へはあるしかたにも
われも〳〵とさるへき事ともはとり〳〵につかう
まつり給おほかた世ゆすりて所せき御い
そきのいきをひ也四位になしてむとおほし
世人もさそあらんとおもへるをまたいときひわ
なるほとをわか心にまかせたる世にてしか
ゆくりなからんも中〳〵めなれたる事なりと
おほしとゝめつあさきにて殿上にかへりたまふ

を大宮はあかすあさましき事とおほしたる○(そ)
ことはりにいとをしかりける・御たいめんなり(あ)
てこの事きこえたまふにたゝいまかうあな
かちにしもまたきにおいつかすましう侍れと
思ふやう侍て大かくのみちにしはしならはさ
むのほい侍によりいま二三年をいたつらの
としに思ひなしてをのつからおほやけにもつか
うまつりぬへきほとにならはいまひとゝな
り侍なむみつからはこゝのへの内におひ○(いて)て侍て

4オ

世中のありさまもしり侍らすよるひる御前

にさふらひてわつかになむはかなきふみなともな
らひ侍したゝかしこき御てよりつたへ侍したに
なに事もひろき心をしらぬほとはふみのさえ
まねふにもことふえのしらへにもね(音)たえて(す)
をよはぬ所のおほくなん侍けるはかなきお
やにかしこきこのまさるためしはいとかたき
事になむ侍れはましてつき〳〵つたはりつゝ
へたゝりゆかんほとのゆくさきいとうしろめ
たきによりなむ思給へをきて侍たかきい
への○(こ)としてつかさかうふり心にかなひ世中さ

かりにおこりならひぬれはかくもんなとに身をく
るしめむ事はいとゝをくなむおほゆへかめる
たはふれあそひをこのみて心のまゝなる官し
やくにのほりぬれは時にしたかふ世人のしたに
ははなましろきをしつゝついせうしけしきとり

4ウ

5オ

つゝしたかうほとはをのつから人とおほえてやむ
ことなきやうなけと時うつりさるへき人にたち
をくれて世をとろふるすゑには人にかるめあな
つらるゝにかゝり所なきことになむ侍猶さえを
もとゝしてこそやまとたましゐの世にもち

5ウ

ゐらるゝ方もつよう侍らめさしあたりては心もと
なきやうに侍りともついのよのおもしとなる
へき心をきてをならひなは侍らすなりなむ
のちもうしろやすかるへきによりなんたゝいま
ははか〳〵しからすなからもかくてはくゝみ侍らは
せまりたる大かくの衆とてわらひあなつる人も
よも侍らしとおもふたまふるなときこえしら
せ給へは・うちなけきたまひてけにかくもおほ
しよるへかりけるをこの大将なともあまりひき
たかへたる御事なりとかたふき侍めるを

6オ

督のこともなとを我よりは下らうと思ひおと
したりしたにみなをの〳〵かゝいしのほりつゝ
をよすけあへるにあさきをいとからしとお
もはれたるか心くるしう侍なりときこえ給へはう
ちわらひ給ていとをよすけてもうらみ侍なゝり
なはとはかなしなこの人のほとよとていとうつ
くしとおほしたりかくもんなとしてすこしもの
の心もえ侍らはそのうらみはをのつからとけ侍
なんときこえ給・あなつくることはひむかしの

6ウ

院にてしたまふひむかしのたいをしつらはれたり
かんたちめ殿上人めつらしくいふかしき事
にしてわれも〳〵とつとひまいりたまへりはか
せともゝ中〳〵おくしぬへしはゝかる所なくれい
あらむにまかせてなたむる事なくきひしう
をこなへとおほせ給へはしゐてつれなく思ひ
なしていゐよりほかにもとめたるさうそくとも
のうちあはすかたくなしきすかたなとをもは

ちなくおももちこはつかひむへ〳〵しくもてな
しつゝ座につきならひたるさほうよりはしめ

7オ

見もしらぬさまともなりわかきゝむたちはえたへ〇
ほゝゑまれぬさるはものわらひなとすましく
すくし〇しつまれるかきりをとえりいたしてへいし
なともとらせたまへれとすちことなりけるまし
らひにて右大将民部卿なとのおふな〳〵かはらけ
とりたまへるをあさましくとかめいてゝをろ
すおほしかいもとあるしはなはたひさうに侍りた
うふかくはかりのしるしとあるなにかしをあらすし
てやおほやけにはつかうまつりたまふはなはた
おこなりなといふに人〳〵みなほころひてわらひ

7ウ

ぬれは又なりたかしなりやまんはなはたひさう也
さをひきてたちたうひなんなとをとしいふも
いとおかし見ならひ給はぬ人〳〵はめつらしくけう
ありとおもひこのみちよりいてたちたま

へるかんたちめなとはしたりかほにうちほ
ほゑみなとしつゝかゝるかたさまをおほしこ
のみて心さし給かめてたき事とかきりなく
おもひきこえたまへり・いさゝか物いふをもせい
すなめけなりとてもとかむかしかましうのゝ
しりをるかほともゝ夜にいりては中〳〵いま

8オ

すこしけちえんなるほかけにさるか〇ましくわひ
しけに人わるけなるなとさま〳〵にけにい
となへてならすさまことなるわさなり〇おとゝは
いとあされかたくなゝる身にてけうまむしま
とはされなむとのたまひてみすの内にかくれ
てそ御らんしけるかすさたまれる座につきあ
まりてかへりまかつる大かくの衆ともあるをき
こしめしてつりとのゝかたにめしとゝめてことに
物なとたまはせけり事はてゝまゐつるはかせ
さい人ともめして又〳〵ふみつくらせ給上達部

8ウ

殿上人もさるへきかきりをはしなとゝめさふらはせ給はかせの人〳〵は四ゐむたゝの人はをとゝをはしめたてまつりて絶句つくり給興ある
題のもしえりて文章博士たてまつるみし
かき比の夜なれはあけはてゝそかうする左中
弁かうしつかうまつるかたちいときよけな
る人のこはつかひもの〳〵しく神さひてよみ
あけたるほといとおもしろしおほえ心こと
なるはかせなりけりかゝるたかきいゑにむ
まれ給てせかいのゑいくわにのみたはふれ給へ

9オ

き御身をもちてまとのほたるをむつひえたの
雪をならし給心さしのすくれたるさまをよろ
つの事によそへなすらへて心〳〵につくりあつめ
たるくことにおもしろくもろこしにももてわたり
つたへまほしけなるよのふみともなりとなむ
そのころ世にめてゆすりけるおとゝの御
はさらなりおやめきあはれなる事さへすく
れたるをなみたおとしてすしさはきしかと女
のえしらぬ事まねふはにくき事をとうた
てあれはもらしつうちつゝきにそかくといふ

9ウ

事せさせ給てやかてこの院のうちに御さうし
つくりてまめやかにさえふかき師にあつけ給
てそかくもんせさせたてまつり給ける・大宮
の御もとにもおさ〳〵まうてたまはすよるひる
うつくしみて猶ちこのやうにのみもてなしき
こえたまへれはかしこにてはえものならひ給は
しとてしつかなる所にこめたてまつりたま
へるなりけり一月に三たひはかりをまいりたま
へとそゆるしきこえ給けるつとこもりゐ給て
いふせきまゝにとのをつらくもおはしますかな

10オ

かくゝるしからてもたかきくらゐにのほり〇もち
いらるゝ人はなくやはあると思きこえ給へ
とおほかたの人からまめやかにあためきたる所

なくをはすれはいとよくねんしていかてさるへき
ふみともとくよみはてゝましらひもし世にもい
てたらむとおもひてたゝ四五月のうちに史記
なといふふみはよみはてたまひてけりいまは
れうしうけさせんとてまつわかおまへにて心み
せさせたまふれいの大将左大弁式部大輔
左中弁なとはかりして御師の大内記をめし

10ウ

て史記のかたきまき〳〵れうしうけむにはかせの
かへさふへきふし〳〵をひきいてゝひとわたりよま
せたてまつり給にいたらぬくまなくかた〳〵にかよ
はしよみたまへるさまつましるしのこらすあさまし
きまてありかたけれはさるへきにこそおはしけ
れとたれも〳〵なみたおとし給大将はましてこお
とゝおはせましかはときこえいてゝなきたまふと
のもえ心つようもてなし給はす・人のうへにて
かたくなゝりと見きゝ侍しをこのおとなふる
におやのたちかはりしれゆくことはいくはくな

らぬよはひなからかゝるよにこそ侍けれなとのたま
ひておしぬくひ給ふをみる御師の心ちうれしく
めいほくあとおもへり大将さか月さしたまへは
いたうゑいしれてをるかほはきいとやせ〳〵なり
り世のひかものにてさえのほとよりはもちゐら
れすゝけなくて身まつしくなむありけるを御覧
しうる所ありてかくとりわきめしよせたるなり
けり身にあまるまて御かへりみをたまひてこの
きみの御とくにたちまちに身をかへたるとおも
へはましてゆくさきはなしふ人なきおほえそ

11オ

あらむかし・大かくにまいりたまふ日はれうもむに
かんたちめの御くるまともかすしらすつとひたり
おほかた世にのこりたる人あらしと見えたる
に又なくもてかしつかれてつくろはれいりたまへる
火さの君の御さまけにかゝるましらひにはたわす
あてにうつくしけなりれいのあやしきものとも

11ウ

のたちましりつゝきゐたる座のすゑをから
しとおほすそいとことはりなるやこゝにて
も又をろしのゝしる物ともありてめさまし
けれとすこしもおくせすよみはてたまひ

12オ

つむかしおほえて大かくのさかゆるころなれはかみ
なかゆしもの人われも〳〵とこの道に心さしあつま
れはいよ〳〵世中にさ小ありはか〳〵しき人お
ほくなんありける文人擬生なといふなる事
ともよりうちはしめすか〳〵しうしはてたまへ
れはひとへに心にいれてしもてしもいとゝはけ
みましたまふとのにもふみつくりしけくはかせ
さい人ともところえたりすへてなに事につけて
も道〳〵の人のさえのほとあらはるゝ世になむ
ありける・かくてきさきゐたまふへきを斎宮

12ウ

ゆ女御をこそはゝ宮も御うしろみとゆつり
きこえ給しかはとおとゝもことつけ給源氏のう
ちしきり后に扣たまはん事世の人ゆるしき
こえす弘徽殿のまつ人よりさきにまいり給に
しもいかゝなとうち〳〵にこなた〇に心よせきこ
ゆる人〳〵おほつかなかりきこゆ・兵部卿宮と
きこえし今は式部卿にてこの御時にはまし
てやむことなき御おほえにておはする御むす
めほいありてまいりたまへりおなし〇と王女御
にてさふらひたまふをおなしくは御はゝかたに

13オ

てしたしくおはすへきにこそはゝきさきのおはし
まさぬ御かはりのうしろみにと事よせてにつ
かはしかるへくととり〳〵におほしあらそひたれと
猶むめつほゐたまひぬ御さいはひのかくひき
か小すくれたまへりけるを世の人おとろきゝこ
ゆ・おとゝ太政大臣にあかり給て大将内大臣にな
り給ぬ世中の事ともまつりこちたまふへく
ゆつりきこえ給人からいとすくよかにきら〳〵
しくて心もちゐなともかしこくものしたまふ

かくもんをたてゝし給ひけれはゐんふたきには

まけたまひしかとおほやけ事にかしこくな
むはら〳〵に御ことも十よ人おとなひつゝも
のしたまふもつきつきになりいてつゝを
とらすさかへたる御いゑのうちなり女は女御
といま一所となんおはしけりわかんとをりはら
にてあてなるすちはをとるましけれとその
はゝ君按察大納言のきたのかたになりて
さしむかへる〇とはのかすおほくなりてそれに
ませてのちのおやにゆつらんいとあいなしと
てとりはなちきこえ給て大宮にそあつ

13ウ

けきこえたまへりける女御には〇なく思ひお
としきこえ給へれと人からかたちなといと
うつくしくそおはしける・火さの君ひとつに
ておひいて給しかとをの〳〵ゆとをにあまり給
てのちは御方ことにてむつましき人なれと

14オ

おのこゝにはうちとくましきものなりとちゝ
おとゝきこえたまひてけとをくなりにたる
をおさな心ちにおもふ事なきにしもあらね
ははかなき花もみちにつけても〇いひ〇あそひ
のついせうをもねんころにまつはれありきて

心さしを見えきこえ給へはいみしうおもひかはし
てけさやかにはいまもはちきこえ給はす御うしろ
みともゝなにかはわかき御心とちなれはとしこ
ろ見ならひ給へる御あはひをにわかにもいかゝは
もてはなれはしたなめきこえんとみるに女
君こそなに心なくおさなくをはすれとおとこ
はさこそものけなきほとゝ見きこゆれおほ
けなくいかなる御なからひにかありけむよそ〳〵
になりてはこれをそしつ心なくおもふへきま
た〇おひなるてのおいさきうつくしきにてか

14ウ

きかはし給へるふみともの心おさなくてをのつ

15オ

からおちゝるおりあるを御かたの人々ほの〳〵
しれるもありけれとなにかはかくこそとたれ
にもきこえん見かくしつゝあるなるへし・ところ
ところのたいきやうともゝはてゝ世中の御い
そきもなくのとやかになりぬるころ時雨うち
しておきのうは風もたゝならぬ夕くれに大宮
の御かたに内のおとゝまいりたまひてひめ
君わたしきこえたまひて御ことなとひかせ
たてまつり給ふ宮はよろつのものゝ上手に

15ウ

おはすれはいつれもつたへたてまつり給ふひ
わこそ女のしたるにゝくきやうなれとらう〳〵
しきものに侍れいまのよにまことしうつたへ
たる人おさ〳〵侍らすなりにたりなにのみこ
くれの源氏なとかそへたまひて女のなかには
おほきおとゝの山里にこめをき給へる人こそい
と上手ときゝ侍れものゝ上手ののちには侍
れとすゑになりて山かつにてとしへたる人のいか
てさしもひきすくれけんかのおとゝいと心ことにこそ
おもひてのたまふおり〳〵侍れとと事よりは

16オ

あそひのかたのさえはなをひろうあはせかれこれ
にかよはし侍こそかしこけれひとりことにて上
手となりけんこそめつらしき事なれなとの
給て宮にそゝのかしきこえたまへはちうさすこと
うゑ〳〵しくなりにけりやとのたまへとおも
しろうひき給ふ・さいはいにうちそへてなをあや
しうめてたかりける人なりやおいのよにも
たまへらぬ女こをまうけさせたてまつり
て身にそへてもやつしゑたらすやむことなき
にゆつれる心をきてこともなかるへき人なり

16ウ

とそきゝ侍なとかつ御物かたりきこえ給ふ女は
たゝ心はせよりこそ世にもちゑらるゝ物に侍
けれなと人のうへのたまひ出て女御をけしう
はあらすなに事も人にをとりてはおひいてす

かしと思ひ給しかとおもはぬ人にをされぬる
すくせになんよはおもひのほかなる物とおも
ひ侍ぬるこの君をたにいかておもふさまに見
なし侍らん東宮の御元服たゝいまの事に
なりぬるをと人しれすおもひ給へこゝろさし
たるをかういふさいはひ人のはらのきさきかね

こそ又おいすかひぬれたちいてたまつらんにま
してきしろふ人ありかたくやとうちなけき
たまへはなとかさしもあらむこのいゑにさるすち
の人いてものしたまはてやむやうあらしと
こおとゝのおもひ給て女御の御事をもゐた
ちいそき給ひしものをおはせましかはかくもて
ひかむる事もなからましなとこの御事にてそ
おほきおとゝをもうらめしけにおもひきこえ
たまへる・ひめ君の御さまのいときひはにうつ
くしうてさうの御ことひきたまふを御くしの

17オ

17ウ

さかりかむさしなとのあてになまめかしきをうち
まもりたまへははちらひてすこしそはみ給へる
かたはらめつらつきうつくしけにてとりゆ
のてつきいみしうつくりたるものゝ心ちする
をみやもかきりなくかなしとおほしたりか
きあはせなとひきすさひ給てをしやり
給つおとゝ和琴ひきよせ給ひてりちの
しらへのなか〳〵いまめきたるをさる上手の
みたれてかいひきたまへる〇おもしろしおまへの
こすゑほろ〳〵とのこらぬにおいこたちなとこゝか

しこのみき丁のうしろにかしらをつとへたり風
のちからけたしすくなしとうちすし給てきん
の音ならねとあやしく物あはれなる夕かな
猶あそはさん〇とて秋風楽にかきあわせて
さうかしたまへる声いとおもしろけれはみ
なさま〳〵おとゝをもいとうつくしと思ひきこ
え給ふにいとゝそへむとにやあらむ火さの君ま

18オ

いり給へりこなたにとてみき丁へたてゝいれ
たてまつり給へりおさ〳〵たいめんもえたま
はらぬかななとかくこの御かくもんのあなかち

ならんさえのほとよりあまりぬるもあちきな
きわさとおとゝもおほしれることなるをかく
おきてきこえたまふやうあらむとはおもふた
まへなからかうこもりおはする事なん心くるしう
侍ときこえ給てとき〳〵はことわさし給へふえ
のねにもふることはつたはるものなりとて御ふ
えたてまつり給ふいとわかうをかしけなる
ねにふきたてゝいみしうおもしろけれは御こと
もをはしはしとゝめておとゝはうし拍おとろ〳〵
しからすうちならしたまひてはきか花すり

なとうたひ給ふ大殿もかやうの御あそひに
心とゝめ給ていそかしき御まつり事ともを
はのかれたまふなりけりけにあちきなき世

18ウ

19オ

に心のゆくわさをしてこそすくし侍なまほし
けれなとの給て御かはらけまいり給ふにくらう
なれは御とのあふらまいり御ゆつけくた物なと
たれも〳〵きこしめすひめ君はあなたにわたし
たてまつりたまひつしゐてけとをくもて
なし給ひ御ことのねはかりをもきかせたてまつ
らしといまはこよなくへたてきこえ給ふをいと

おしきことありぬへき世なるこそとちかうつ
かうまつるおほ宮の御方のねひ人ともさゝめ
きけりおとゝいてたまひぬるやうにてしのひ
て人にものゝたまふとてたちたまへりける
をやをらかいほそりていてたまふみちにかゝる
さゝめきことをするにあやしうなり給て御みゝ
とゝめたまへはわか御うへをそいふ・かしこかり給へ
と人のおやよをのつからおれたる事こそ
いてくへかめれこをしるはといふはそらことなめり
なとそつきしろふあさましくもあるかなされは

19ウ

よおもひよらぬ事とはあらねといはけなきほと
にうちたゆみて世はうきものにもありけるかな
とけしきをつふ〳〵とこゝろ小たまへとをともせ
ていて給ぬ御さきをふこゑのいかめしきにそ
殿は今こそいてさせたまひけれいつれのくま
におはしましつらんいまさへかゝる御あたけこそとい
ひあへりさゝめきことの人〳〵はいとかうはしき
かのうちそよめきいてつるは火さの君のおは
しましつるとこそ思ひつれあなむくつけやし
りうことやほのきこしめしつらんわつらはしき御

20オ

心をとわひあへり・とのはみちすからおほすにい
とくちおしくあしき事に〇あらねとめつらしけ
なきあはひによ人もおもひいふへき事おとゝ
のしゐて女御をゝしゝつめ給ふもつらき
にわくらはに人にまさる事もやとこそおもひ
つれねたくもあるかなとおほすとのゝ御中の

20ウ

おほかたにはむかしもいまもいとよくおはしなから
かやうのかたにてはいとみきこえたまひし
なこりもおほしいてゝ心うけれはねさめかち
にてあかしたまふ大宮もさやうのけしき

は御らんすらむ物をよになくかなしうしたまふ
御むまこにてまかせてみたまふならんと人〳〵
のいひしけしきをめさましうねたしとおほす
に御心うこきてすこしおゝしくあさやきた
る御心にはしつめかたし二日はかりありてまいり
給へりしきりにまいり給ふ時は大宮もいと御
こゝろゆきうれしき物におほいたり御あまひ
たひひつきくろひうるはしき御こうちきなと
たてまつりそへてこなからはつかしけにおは
する人さまなれはまおならすそ見えたてまつ

21オ

り給ふ・おとゝ御けしきあしくてこゝにさふらふも
はしたなく人〳〵いかに見侍らんと心をかれにたり

21ウ

はか〳〵しき身に侍らねと世に侍らんかきり御
めかれす御覧せられおほつかなきへたてなく
とこそおもひたまふれよからぬものゝうへにて
うらめしと思ひきこえさせつへきことのいてまう
てきたるをかうもおもふたまへしとかつはおも
ふ給〇れとなをしつめかたくおほえ侍てなん
となみたをしのこひ給ふに宮けさうしたま
へる御かほの色たかひて御めもおほきになり

22オ

ぬいかやうなる事にてかいまさらのよはひのす
ゑに心をきてはおほさるらんときこえたまふも
さすかにいとおしけれと・たのもしき御かけにお
さなきものをたてまつりをきて身つからは
なか〳〵おさなくより見たまへもつかすまつめ
にちかきかましらひなとはか〳〵しからぬを見
たまへなけきいとなみつゝさりとも人とな
させたまひてんとたのみわたり侍つるにおも
はすなることの侍ければいとくちをしう

なんまことにあめのしたなんならふ人なきい

22ウ

ふそくには物せらるめれとしたしきほとにかゝる
は人の〇おもふ所もあはつけきやうになむなに
はかりのほ〇にもあらぬなからひにたにし侍をか
の人の御ためにもいとかたはなる事也さし
はなれきら〳〵しうめつらしけあるあたり
にいまめかしうもてなさるゝこそおかしけれゆ
かりむつひねちけかましきさまにておとゝも
きゝおほす所侍なんさるにてもかゝることなん
としらせ給てことさらにもてなしすこしゆかし
けなる事をませてこそ侍らめおさなき人

23オ

人の心にまかせて御らんしはなちけるを心うく
おもふたまふるときこえ給ふに夢にもしり
たまはぬ事なれはあさましうおほして・けに
かうのたまふもことはりなれとかけてもこの人
人のしたの心なんしり侍らさりけるけにいと

くちおしき事はこゝにこそましてなけくへく侍
れもろともにつみをおほせたまふはうらめしき
事になん見たてまつりしより心ことに思ひた
まひてそこにおほしいたらぬ事をもすく
れたるさまにもてなさむとこそ人しれす思ひ

23ウ

侍れものけなきほとを心のやみにまとひてい
そき物せんとはおもひよらぬ事になんさてもたれ
かはかゝることはきこえけんよからぬ人のことにつき
てきはたけくおほしのたまふもあちきなく
むなしきことにて人の御なやけかれんとのた
まへはなにのうきたる事にか侍らんさふしふ
める人〳〵もかつはみなもときわらふへかめる
ものをいとくちおしくやすからす思ひたまへ
らるゝやとてたちたまひぬ心しれる人は
いみしういとおしくおもふ一夜のしりうこと

24オ

の人〳〵はまして心ちもたかひてなにゝかゝるむ
つものかたりをしけんとおもひなけきあへりひ
め君はなに心もなくておはするにさしのそき
たまへれはいとらうたけなる御さまをあは
れに見たてまつり給わかき人といひなから心
おさなく物したまひけるをしらていとかく
人なみ〳〵にと思ひける我こそまさりてはか
なけれとて御めのとともをさいなみ給ふに
きこえんかたなし・かやうのことはかきりなきみか
との御いつきむすめもをのつからあやまつため

24ウ

しむかしものかたりにもあめれとけしきをしり
つたふる人さるへきひまにてこそあらめこれ
はあけくれたちましり給てとしころおはし
ましつるをなにかはいはけなき御ほとを宮の
御もてなしよりさしすくしてもへたてきこえさせ
むとうちとけてすくしきこえつるおとしは
かりよりはけさやかなる御もてなしになりわ
て侍めるにわかき人とてもうちまきれはみい

かにそやよつきたる人もおはすへかめるをゆ
めにみたれたる所おはしまさゝめれはさらに

25オ

おもひよらさりける事とをのかとちなけく・よし
しはしかゝる事もらさしかくれあるましきなれと
心をやりてあらぬ事と〇いひなされよいまかし
こにわたしたてまつりてん宮の御心〇いとつら
きなりそこたちはさりともいとかゝれとしも
おもはれさりけむとのたまへはいとをしきなか
にもうれしくのたまふと思ひてあないみしや
大納言とのにきゝ給はん事をさへおもひ侍れ
はめてたきにてもたゝ人のすちはなにのめつ
らしさにかおもふたまへかけんときこゆ・ひめ君は

25ウ

おさなけなる御さまにてよろつに申給へとも
かひあるへきにもあらねはうちなきたまひてい
かにしてかいたつらになり給ふましきわさすへから
むとしのひてさるへきとちの給て大宮をの
みうらみきこえたまふ・宮はいと〳〵おしとおほす
なかにもおとこ君の御かなしさはすくれ給ふにや
あらむかゝる心のありけるもうつくしうおほさるゝ
になさけなくこよなきことのやうにおほしのたま
へるをなとかさしもあるへきもとよりいたう思ひつ
き給ふことなくてかくまてかしつかむともおほした

26オ

えさりしをわかかくもてなしそめたれは〇東宮の
御事をもおほしかけためれとりはつしてたゝ人
のすくせあらはこの君よりほかにまさるへき人
やはかたちありさまよりはしめてひとしき
人のあるへきかはこれよりをよひなからむきはにも
とこそおもへとわか心さしのまされはにやおとゝを
うらめしう思ひきこえたまふ御心のうちをみせ
たてまつりたらはましていかにうらみきこえ
たまはん・かくさはかるらんともしらて火さの君まいり
給へり一夜も人めしけうておもふ事をもえき

26ウ

こえすなりにしかはつねよりもあはれにおほ
え給けれは夕つかたおはしたるなるへし宮れい
はおいしらすうちゑみてまちよろこひたまふをま
めたちて物語なときこたまふついてに御こと
によりうちのおとゝのゑんしてものしたまひに
しかはいとなむいとをしきゆかしけなき事
をしも思ひそめたまひて人に物をもはせ給
つへきか心くるしきことかうもきこえしとおも
へとさる心もしりたまはてやとおもへはなんと
きこえ給へはこゝろ〇かゝれることのすちなれはふと

27オ

おもひよりぬおもてあかみてなに事にか侍ら
むしつかなる所にこもり侍にしのちともかく
も人にましるなりなけれはうらみ給ふへき
こと侍らしとなん思ひ給ふるとていとはつかしと
おもへるけしきをあはれにこゝろくるしうてよし
いまはよりたにようしたまへとはかりにてこと事
にいひなしたまふつ・いとゝふみなともかよはんこ

とのかたきなめりとおもふにいとなけかしも
のまいりなとしたまへとさらにまいらせねたま
ひぬるやうなれと心も空にて人しつまるほと

27ウ

になかさうしをひけとれいことにさしかため
なともせぬをつとさして人のをともせすいと
心ほそくおほえてさうしによりかゝりてゐた
まへるに女君もめをさまして風のをとの竹
にまちとられてうちそよめくにかりのなきわ
たるこゑのほのかにきこゆるにおさなき心ち
にもとかくおほしみたるゝにや雲井の雁もわか
ことやとひとりこち給ふけわひわかうらう
たけなりいみしう心もとなけれはこれあけ
させ給へこしゝうやさふらふとのたまへとをとも

28オ

せす御めのとこなりひとりことをきゝたまひける
もはつかしうてあいなく御かほひきいれたまへと
あはれはしらぬにしもあらぬそにくきやめのと

たちなとちかくふしてうちみしろくもくるし
けれはかたみにをとせす
　さ夜中にともよひわたる雁かねにうたてふき
そふおきのうは風身にもしみけるかなとおもひ
つゝけてみやのおまへにかへりてなけきかちなる
も御めさめてやきかせ給らんとつゝましくみしろ
きふしたまへりあいなくものはつかしうてわか御かた

28ウ

にとくいてゝ御ふみかきたまへれとこ侍従にも
えあひたまはすかの御方さまにもえいかすむ
ねつふれておほえたまふ・女はたさはかれたまひ
しことのみはつかしうてわか身やいかゝあらむ人やいかゝ
おもはんともふかくおほしいれすおかしうらうたけ
にてうちかたらふさまなとをうとましとも思ひ
はなれたまはさりけり又かうさはかるへき事と
もおほさゝりけるを御うしろみともゝいみしうあ
はめきこゆれはえこともかよはしたまはすおと
なひたる人やさるへきひまをもつくりいつらん

おとこ君もいますこし物はかなきとしのほとにて
たゝいとくちおしとのみおもふ・おとゝはそのまゝ
にまいり給はす宮をいとつらしと思ひきこえ
給ふきたのかたにはかゝることなむとけしきも
みせたてまつりたまはすたゝおほかたいと
むつかしき御けしきにて中宮のよそほひこと
にてまいりたまへるに女御のよの中思ひしめ
りて物したまふを心くるしうむねいたきにまか
てさせたてまつりて心やすくうちやすませ
たてまつらんさすかにうへにつとさふらはせ給

29ウ

ふてよるひるおはしますめれはある人〳〵も
こゝろゆるひせすくるしうのみわふめるにと
のたまひてにわかにまかてさせたてまつり
たまふ御いとまもゆるされかたきをうちむ
つかりたまうてうへはしふ〳〵におほしめしたる
をしゐて御むかへし給つれ〳〵におほされんを

29オ

ひめ君わたしてもろともにあそひなとし給へ宮
にあゆけたてまつりたるうしろやすけれと
いとさくしりおよすけたる人たちましりて
をのつからけちかきもあいなきほとになりに

30オ

たれはなむときこえたまひてにはかにわたし
きこえたまふ・宮いとあへなしとおほしてひとり
ものせられし女なくなりたまひてのちい
とさう〳〵しく心ほそかりしにうれしうこの
君をえていけるかきりのかしつきものと思ひ
てあけくれにつけておいのむつかしさもなくさめ
むとこそおもひつれ思ひのほかにへたてあり
ておほしなすもつらくなむときこえたまへは・う
ちかしこまりて心にあかすおもふ給へらるゝ事
はしかなん思給へらるゝとはかりきこえさせしに

30ウ

なんふかくへたておもふたまふる事はいかて
か侍らん内に候か世中うらめしけにてこの
ころまかてゝ侍るにいとつれ〳〵に思ひてくし
侍れは心くるしう見たまふるをもろともにあ
そひわさをもしてなくさめよとおもふたまへて
なんあからさまにものし侍とてはくゝみ人とな
させ給へるをおろかにはよも思ひきこえさせしと
申たまへは・かうおほしたちにたれはとゝめきこ
え給ふもも(ママ)おほしかへすへき御心ならぬにいと
あかすくちおしうおほされて人の心こそうき

31オ

物はあれとかくおさなき心ともにも我にへたてゝ
うとましかりける事に又さもこそあらめおとゝ
のものゝ心をふかうしりたまひなから我をゑ
むしてかくゐてわたし給ふ事かしこにてこれ
よりうしろやすき事もあらしとうちなき
つゝのたまふおりしも火さの衣君まいり給へり〇もし
いさゝかのひまもやとこのころはしけうほのめ
きたまふなりけり内のおとゝの御車のあ
れは心のおにゝはしたなくてやをらかくれて

わか御かたにいりゐたまへり・内の大殿の君た
ち左少将少納言兵衛佐侍従たいふなといふ
もみなこゝにはまいりつとひたれとみすのうち
はゆるしたまはす左衛門督権中納言なともこ
と御はらなれと古殿の御もてなしのまゝに今
もまいりつかうまつり給ふことねんころなれは
その御こともゝさま〳〵まいりたまへとこの君
にゝるにほひなく見ゆ大宮の御心さしもなす
らひなくおほしたるをたゝこのひめ君をそ
けちかうらうたきものにおほしかしつきて御かた
はらさけすうつくしき物におほしたりつるを

31ウ

かくてわたりたまひなんかいとさうさしき事を
おほす・とのはいまのほとにうちにまいり侍て
夕つかたむかへにまいり侍らんとていて給ぬいふか
ひなき事をなたらかにいひなしてさてもや
あらましとおほせと猶いと心やましけれは人の

32オ

御ほとのすこしもの〳〵しくなりなんにかたはな
らす見なしてそのほと心さしのふかさあさゝの
おもむきをも見さためてゆるすともことさら
なるやうにもてなしてこそあらめせいしいさむ
ともひと所にてはおさなき心のまゝに〇(み)くる

32ウ

しうこそあらめ宮もよもあなかちにせいしの
たまふことあらしとおほせは女御の御つれく
にことつけてこゝにもかしこにもおいらかにい
ひなしてわたしたまふなりけり・宮の御ふみに
ておとゝこそうらみもしたまはめ君はさりと
も心さしのほともしりたまふらんわたりてみえ
たまへときこえ給へれはいとをかしけにひき
つくろひてわたり給へり十四になんおはしける
かたなりにみえたまへといとこめか〜(し)うしめ
やかにうつくしきさましたまへりかたはらさけ

33オ

たてまつらすあけくれのもてあそひ物に

おもひきこえつるをいとさうさうしくもあるへ
きかなのこりすくなきよはひのほとにて御あ
りさまをみはつましき事といのちをこそ思
ひつれいまさらに見すてゝうつろひたまふや
いつちならんとおもへはいとこそあはれなれとて
なき給ふひめ君ははつかしき事をおほせは
かほももたけ給はてたゝなきにのみなき給
ふおとこ君の御めのとさい相の君いてきて
おなし君とこそたのみきこえさせつれくちおし

33ウ

くかくわたらせ給とと殿はことさまにおほし
なることおはしますともさやうにおほしなひかせ
たまふなゝとさゝめききこゆれはいよ〳〵は
つかしとおほして物もの給はすいてむつかしき
ことなきこえられそ人の御すくせ〳〵のいとさた
めかたくとのたまふいてやものけなしとあなつ
りきこえさせ給に侍めりかしさりともけにわか
君や人におとりきこえさせ給ときこしめ

しあはせよとなま心やましきまゝにいふ火さ
の君ものゝうしろにいりゐて見たまふに人の

34オ

とかめんもよろしきときこそくるしかりけれ
いと心ほそくてなみたをしのこひつゝおはする
けしきを御めのといと心くるしうみて宮にとか
くきこえたはかりてゆふま暮の人のまよひに
たいめむせさせ給へりかたみに物はつかしくむね
つふれてものもいはてなき給・おとゝの御心の
いとつらけれはさはれ思ひやみなんとおもへと
恋しうをはせんこそわりなかるへけれなとてすこ
しひまありへかりつる日ころよそにへたて
つらんとのたまふさまもいとわかうあはれけな

34ウ

れはまろもさこそはあらめとのたまふ恋し
とはおほしなんやとの給へはすこしうなつき
給ふさまもおさなけなり御となふらまいりと
のまかてたまふけはひこたちたくをひのゝ

しる御さきのこゑに人〳〵そゝやなとおちさ
はけはいとおそろしとおほしてわなゝきたまふ
さもさはかれはとひたふるにゆるしきこえ
給はす御めのとまいりてもとめたてまつる
にけしきをみてあな心つきなやけに宮
しらせたまはぬ事にはあらさりけりと

35オ

おもふにいとつらくいてやうかりける世かな
殿のおほしのたまふ事はさらにもきこえ
す大納言殿にもいかにきかせ給はんめてた
くとも物のはしめの六位すくせよとつふや
くもほのきこゆたゝこのひやうふのうしろ
にたつねきてなけくなりけりおとこ君わ
れをは位なしとてはしたなむるなりけりと
おほすに世中うらめしけれはあはれもすこ
しさむる心ちしてめさましかれきゝたまへ

35ウ

くれなゐのなみたにふかき袖の色をあさみ
とりにやいひしほるへきはつかしとのたまへは
色〳〵に身のうきほとのしらるゝはいかにそめ
けるなかの衣そとのたまひはてぬにとのいり
たまへはわりなくてわたり給ぬ・おとこ君はたち
とまりたる心ちもいと人わろくむねふたかり
て我御かたにふし給ぬ御車みつはかりにて
しのひやかにいそきいて給ふけはひをきくも
しつ心なけれは宮のおまへよりまいりたまへ
とあれとねたるやうにてうこきもし
たまはすなみたのみとゝまらねはなけき

36オ

あかしてしものいとしろきにいそきいてたま
ふうちはれたるまみも人に見えんかはつかしき
に宮はためしまつはすへかめれは心やすき
所にとていそきいて給ふなりけりみちのほ
と人やりならす心ほそくおもひつゝくるに空
のけしきもいたうくもりてまたくらかりける
霜こほりうたてむすへる明くれに空かき
くらしふるなみたかな・大とのにはことし五せちた

てまつり給ふなにはかりの御いそきならねとわら
はへのさうそくなとちかうなりぬとていそきせ

36ウ

させ給ふひむかしの院にはまいりの夜の人〳〵
さうそくせさせたまふとのにはおほかたの事
とも中宮よりもわらはしもつかへのれう
なとえならてたてまつれたまへりすき
にしとし五せちなとゝりしかさう〳〵しかり
しつもりもとりそへうへ人の心ちもつねよ
りも花やかにおもふへかめるとしなれは
ところ〳〵いとみていといみしくよろつ
をつくしたまふきこえあり按察大納言
左衛門督うへの五せちにはよしきよいま

37オ

はあふみのかみにて左中弁なるなんたてまつ
りけるみなとゝめさせたまひて宮つかへすへ
くおほせ事ことなる年なれはむすめ
ををの〳〵たてまつり給殿のまひ姫は

これみつのあそむのつのかみにて左京大夫
かけたるむすめかたちなといとをかしけ
なるきこえあるをめすからい事におもひ
たれと大納言のほかはらのむすめをたて
まつらるなるにあそむのいつきむすめい
たしたてたらん何のはちかあるへきと

37ウ

さいなめはわひておなしくはみやつかへやかて
せさすへくおもひをきてたりまひならは
しなとはさとにていとようしたてゝかしつき
なとしたしう身にそふへきはいみしうゑ
とゝのへてその日の夕つけてまいらせたり
とのにも御かた〳〵のわらはしもつかへのすく
れたるをと御らんしくらへえりいてらるゝ心地
ともはほと〳〵につけていとおもたゝしけなり
御前にめして御らんせんうちならしに御
まへをわたらせてとさためたまふすつへう

38オ

もあらすとり〳〵なるわらはへのやうたいか
たちをおほしわつらひていま一ところのれ
うをこれよりたてまつらはやなとわらひた
まふたゝもてなしよういによりてそえらひ
にいりける・大かくの君むねのみふたかりて
ものなとも見いれられすくんしいたくてふ
みもよまてなかめふしたまへるを心もやな
くさむとたちいてゝまきれありき給ふさ
まかたちはめてたくおかしけにてしつや
かになまめいたまへれはわかき女はうなとは

38ウ

いとをかしとみたてまつるうへの御かたには〇(みすの)
のまへにたにものちかうもゝてなしたまはすわ
か御心ならひいかにおほすにかありけんうと〳〵
しけれはこたちなともけとをきをけふは
物のまきれにいりたちたまへるなめりま
ひゝめかしつきおろしてつま戸のまに屏風
なとたてゝかりそめのしつらいなるにや

をらよりてのそき給へはなやましけにてそ
ひふしたりたゝかの人の御ほとゝみえてい
ますこしそひやかにやうたいなとのことさ

39オ

ゆ(ら)ひをかしき所はまさりてさへみゆくらけれは
こまかにはみえねとほとのいとよくおもひい
てらるゝさまに心うつるとはなけれとたゝにも
あらてきぬのすそをひきならし給ふなに
心もなくあやしとおもふに
　あめにますとよわか(ママ)ひめのみや人も我心さ
すしめをわするなみつかきのとのたまふそ
うちつけなりけるわかうを(お)かしきこゑなれと
たれともえおもひなされすなまむつかしき
にけさうしそふとてさはきつるうしろみとも

39ウ

ちかうよりて人さはかしうなれはいとくちおし
うてたちさり給ぬ・あさきの心やましけれ
はうちへまいる事もせす物うかり給ふを五節

にことつけてなをしなとさまかはれる色ゆる
されてまいり給ふきひはにきよらなる物か
らなる物からもまたきにおよすけてされあり
きたまふみかとよりはしめたてまつりて
おほしたるさまなへてならすよにめつらし
き御おほえなり・五せちのまいるきしきはい
つれともなく心〳〵にになくしたまへるをま

40オ

ひ姫のかたち大とのゝと大納言殿とはすく
れたりとめてのゝしるけにいとをかしけ
なれとこゝしううつくしけなる事は猶お
ほ殿にはあをよふましかりける物きよけに
いまめきてその物ともみゆましうしたてたる
やうたいなとのありかたうをかしけなるをか
うほめらるゝなめりれいのまひゝめともより
はみなすこしおとなひつゝけに心ことなるとし
なりとのまいりたまひて御らんするにむ
かし御めとまりたまひしおとめのすかたを

おほしいつたつの日のくれつかたつかはす御ふみ
のうちおもひやるへし
おとめこも神さひぬらし天つ袖ふるきよ
のともよはひへぬれはとし月のつもりをか
そへてうちおほしけるまゝのあはれをえしの
ひ給はぬはかりのをかしうおほゆるもはかなしや
かけていへはけふの事とそおもほゆる日
かけのしもの袖にとけしもあをすりのかみ
よくとりあつてまきらはしかいたるこすみ
うすゝみさうかちにうちませみたれたるも

41オ

人のほとにつけてはをかしと御らんす火さの
君も人のめとまるにつけても人しれすお
もひありき給へとあたりちかくたによせす
いとけゝしうもてなしたれはものつゝまし
きほとの心にはなけかしうてやみぬかたちはし
もいと心につきてつらき人のなくさめにも

みるわさしてんやとおもふ・やかてみなとゝめ
させ給て宮つかへすへき御けしきありけれと
このたひはまかてさせてあふみのはからさきの
はらへつのかみはなにはといとみてまかてぬ大

41ウ

納言もことさらにまいらすへきよしそうせさせ
給ふ左衛門督その人ならぬをたてまつりて
とかめありけれとそれもとゝめさせたまふ
つのかみは内侍のすけあきたるにと申さ
せたれはさもやいたはらましと大殿もおほ
いたるをかの人はきゝ給ていとくちをしと
おもふわかとしのほとくらゐなとかくものけ
なからすはこひみてまし物をおもふ心ありと
たにしられてやみなん事とわさとの事には
あらねとうちそへてなみたくまるゝおり〳〵

42オ

ありせうとのわらは殿上するつねにこの君
にまいりつかうまつるをれいよりもなつかしう
かたらひたまうて五せちはいつか内へはまいる
とゝひたまふことしとこそはきゝ侍れとき
こゆかほのいとよかりしかはすゝろにこそ恋し
けれましかつねにみるらんもうらやましきをまた
みせてんやとのたまへはいかてかさは侍らん心
にまかせてもえみ侍らすおのこはらからと
てちかくもよせ侍らねはましていかてかきむた
ちには御覧せさせんときこゆさらはふみをた

42ウ

にとて給へりさき〳〵かやうの事はいふものを
とくるしけれとせめてたまへはいとおしうて
もていぬとしのほとよりはされてやありけん
をかしと見けりみとりのうすやうのこのましき
かさねなるにてはまたいとわかけれとをいさき
見えていとをかしけに
　日かけにもしるかりけめやおとめこかあまの
は袖にかけし心はふたりみるほとにちゝぬし
ふとよりきたりおそろしうあきれてえひき

かくさすあそのふみそとてとるにおもてあかみ

てゐたりよかゝぬわさしけりとにくめはせうと
にけていくをよひよせてたかそとゝへはとのゝ
火さの君のしか〳〵のたまうてたまへるといへ
はなこりなくうちゑみていかにうつくしき君の
御され心なりきむちらはおなしとしなれといふか
ひなくはかなかめりかしなとほめてはゝ君にもみ
すこの君たちのすこし人かすにおほしぬへか
らましかはおほそゝのみやつかへよりはたてまつ
りてましとのゝ御心をきてをみるに見そめ
給ひてん人を御心とはわすれ給ふましきに

43オ

こそいとたのもしけれあかしの入道のためし
にやならましなといへとみないそきたちにけ
り・かの人はふみをたにえやり給はすたちま
さるかたのことし心にかゝりてほとふるまゝに
わりなく恋しきおもかけに又あひみてやと

43ウ

おもふよりほかの事なし宮の御もとへもあいなく
心うくてまいり給はすおはせしかたとしころあ
そひなれし所のみおもひいてらるゝ事まさ
れはさとさへうくおほえ給つゝまたこもりゐ
たまへり・とのはこのにしのたいにそきこえあ

44オ

つけたてまつり給ひける大宮の御世のゝこ
りすくなけなるをおはせすなりなんのち
もかくおさなきほとより見ならしてうし
ろみおほせときこえ給へはたゝの給ふまゝ
の御心にてなつかしうあはれに思ひあつかひ
たてまつり給ふほのかになと見たてまつる
にもかたちのまをならすもおはしけるかなかゝ
る人をも人はおもひすて給はさりけりなと
わかあなかちにつらき人の御かたちを心にかけ
て恋しとおもふもあちきなしや心はへのかう

44ウ

やうにやはらかならん人をこそあひおもはめと

おもひ又むかひてみるかひなからむもいとおしけ
なりかくてとしへたまひにけれと殿のさやう
なる御かたち御心とみたまふてはまゆふは
かりのへたてさしかくしつゝなにくれともてなし
まきらはし給めるもむへなりけりとおもふ心
そはつかしける大宮のかたちことにおはしま
せとまたいときよらにおはしこゝにもかしこ
にも人はかたちよきものとのみめなれたま
へるをもとよりすくれさりける御かたちのやゝ

45オ

さたすきたる心ちしてやせ〳〵に御くしすく
なゝるなとかかくそしらはしきなりけり・とし
のくれにはむ月の御さうそくなと宮はたゝ
この君ゆ(ひ)と所の御ことをましる事なういそ
き給ふあまたくたりいときよらにしたて給へ
るをみるもものうくのみおほゆれはついたち
なとにはかならすしも内へまいるましうおもひ
給ふるになにゝかくいそかせ給ふらんときこえ
たまへはなとてかさもあらんおいくつ(お)をれたらん
人のやうにものたまふかなとのたまへはお

45ウ

いねとくつ(お)をれたる心ちそするやとひとり
こちてうちなみたくみてゐたまへりかの事
をおもふならんといと心くるしうて宮もうちひ
そみ給ぬおとこはくちおしききはの人たに
心をたかうこそつかうなれあまりしめやかに
かくなものしたまひそなにかかうなかめかちに
おもひいれ給ふへきゆゝしうとのたまふなに
かは六位なと人のあなつり侍めれはしはし
の事とはおもふ給ふれと内へまいるもの
うくてなんこおとゝおはしまさましかはたはふ
れにても人にはあなつられ侍らさらまし物
物(へ)不たてぬおやにおはすれといとけゝしうさ
しはなちておほいたれはおはしますあたりに
たやすくもまいりなれ侍らすひんかしの院にて

46オ

のみなんおまへちかく侍るたいの御かたこそあ
はれにものしたまへおやいまひとゝころおはし
まさましかは何事を思ひ侍らましとてなみた
のおつるをまきらはし給へるけしきいみしう
あはれなるに宮はいとゝほろ〳〵となき給
てはゝにをくるゝ人はほと〳〵につけてさのみ

こそあはれなれとをのつからすくせ〳〵に人とな
りたちぬれはをろかにおもふ人もなきわさ
なるを思ひいれぬさまにてをものしたまへ
こおととのいましはしたに物し給へかしかきり
なきかけにはおなし事とたのみきこゆれと
おもふにかなはぬことのおほかるかな内のおと
との心はへもなへての人にはあらすと世人
もめていふなれとむかしにかはる事のみまさ
りゆくにいのちなかさもうらめしきにおい
さきとをき人さへかくいさゝかにてもよを

おもひしめり給へれはいとものむよろつうらめ
しき世なるとてなきおはします・ついたちにも
大とのは御ありきしなけれはのとやかにてお
はしますよしふさのおとゝときこえけるいにしへ
のれいになすらへて御むまひきせちゑの日は
内のきしきをうつしてむかしのためしよりもこと
そへていつかしき御ありさまなり・きさらきのは
つかあまり朱雀院に行幸あり花さかりは
またしきほとなれとやよひは古宮の御忌
月なりとくひらけたる桜の色もいとおもし

ろけれは院にも御よういことにつくろひみ
かゝせたまひ行幸につかうまつり給ふ上達
部みこたちよりはしめ心つかひし給へり人〳〵
みなあを色に桜かさねをきたまふみかとはあ
か色の御そたてまつれりめしありておほ
きおとゝまいり給ふおなしあか色をきたまへ
れはいよ〳〵ひとつものとかゝやきてみえまか

はせ給人〳〵のさうそくよういつねにことなり
院もいときよらにねひまさらせ給うて御さま
よういなまめきたるかたにすゝませ給へりけふ

48オ

はわさとの文人もめさすたゝそのさえかしこし
ときこえたるかく生十人をめす式部のつ
かさの心みの題をなすらへて御たい給ふ大殿の
たらう君の心み給はりたまふへきゆへなめり
おくたかきものともは物もおほえすつなかぬ
舟にのりて池にはなれいてゝいとすへなけな
り日やう〳〵くたりてかくの舟ともこきまひて
調子ともそうするほとの山風のひゝきお
もしろくふきあはせたるにくはんさの君はかう
くるしきみちならてもましらひあそひぬへき

48ウ

ものをと世中うらめしうおほえ給けり春
鶯転[調]まふほとにむかしの花のえんのほとお
ほしいてゝ院のみかとも又さはかりのことみてん
やとのたまはするにつけてその世のことあは
れにおほしつゝけらるまひはつるほとにお
とゝ院に御かはらけまいり給ふ
　うくひすのさえつるこゑはむかしにてむつれし
花のかけそかはれる院のうへ
　こゝのへをかすみへたつるすみかにも春と
つけくる鶯のこゑ帥のみこときこえし

今は兵部卿にていまのうへに御かはらけまいり
給ふ
　いにしへをふきつたへたるふえ竹にさえつる
とりのねさへかはらぬあさやかにそうしなし給へる
よういことにめてたしとらせたまひて
　鶯のむかしを恋てさえつるは木つたふはなの
色やあせたるとのたまはする御ありさまこ
よなくゆへ〳〵しくおはしますこれは御わたく
しさまにうち〳〵の事なれはあまたにもなか
れすやなりにけん又かきおとしてけるにやあ

49オ

らん・楽所とをくておほつかなければ御前に御
ことゝもめす兵部卿の宮ひは内のおとゝ
和琴さうの御こと院の御まへにまいりて琴
はれいのおほきおとゝたまはり給さるいみし
き上手のすくれたる御てつかひとものつく
し給へるねはたとへんかたなしさうかの殿上
人あまたさふらふあなたうとあそひてつき
にさくら人月おほろにさしいてゝをかしきほ
とになか島ゆわたりにこゝかしこかゝり火と
もともしておほみあそひはやみぬ・夜ふけ

49ウ

ぬれはかゝるつゐてにおほきさいの宮おはし
ますかたをよきてとふらひきこえさせ給はさ
らんもなさけなければかへさにわたらせ給おとゝ
もろともにさふらひ給ふきさきまちよろこひ給
ひて御たいめんありいといたうさたすき給ひ
にける御けはひにもこ宮をおもひいてきこえ

50オ

給てかくなかくおはしますたくひもおはしまし
けるものをとくちおしうおもほす・いまはかく
ふりぬるよはひによろつのことわすれ侍に
けるをいとかたしけなくわたりおはしまいたる

50ウ

になんさらにむかしの御世のことおもひいてられ侍
とうちなき給ふ・さるへき御かけともにをくれ侍
てのち春のけちめもおもふ給へわかれぬを
けふなんなくさめ侍ぬる又〳〵もときこえ給
ふ・をとゝもさるへきさまにきこえてことさらに
さふらひてなときこえたまふのとやかならて
かへらせ給ふひゝきにも后はなをむねうちさは
きていかにおほしいつらんよをたもち給へき
御すくせはけたれぬものにこそといにしへを
くひおほす・内侍のかむの君ものとやかにお

51オ

ほしいつるにあはれなる事おほかりいまもさる
へきおり風のつてにもほのめきたまふ事

たえさるへし后はおほやけにそうせさせ給
ふことあるとき〳〵そ御たうはりのつかさかう
ふりなにくれのことにふれつゝ御心にかなはぬ
ときそいの〇ちなかくてかゝるよのすゑをみる事
ととりかへさまほしうよろつおほしむつかり
ける老もておはするまゝにさかなさもまさり
て院もくらへくるしくたへかたくそおもひきこ
え給ひける・かくて大かくの君その日のふみう

つくしうつくりたまうて進士になり給ひぬ
としつもれるかしこきものともをえらせ給しか
ともきうたいの人わつかに三人なんありける
秋のつかさめしにかうふりえて侍従になり
給ぬかの人の御事わするゝ世なけれとお
とゝのせちにまもりきこえ給もつらけれ
はわりなくてなともたいめんし給はす御せう
そこはかりさりぬへきたよりにきこえ給ひ
てかたみに心くるしき御なかなり・大殿しつ

51ウ

かなる御すまゐをおなしくはひろく見ところ

52オ

ありてこゝかしこにておほつかなきやまさと
人なとをもつとへすませんの御心にて六条
京極のわたりに中宮のふるき宮のほと
りをよまちをしめてつくらせ給・式部卿宮あ
けんとしそ五十になりたまひけるを御賀
の事たいのうへおほしまうくるにおとゝも
けにすくしかたき事ともなりとおほして
さやうの御いそきもおなしくはめつらしからむ
御いゑゐにてといそかせ給ふ・としかへりては
ましてこの御いそきのこと御としみのことかく

人まひ人のさためなとを御心にいれていと
なみたまふ経仏ほうしのひの御さうそくろく
ともなとをなんうへはいそかせ給けるひむか
しの院にもわけてしたまふ事ともあり御
なからひましていとみやひかにきこえかはして

52ウ

なんすくし給ひける世中ひゝきゆすれる
御いそきなるを式部卿宮にもきこしめして
としころ世中にはあまねき御心なれとこ
のわたりをはあやにくになさけなくことにふれ
てはしたなめ宮人をも御よういなくうれはし

き事のみおほかるにつらしと思をき給事こ
そはありけめといとをしくもからくもおほし
ける〇かくあまたかゝつらひ給へる人〳〵おほかる
なかにとりわきたる御おもひすくれて世に
心にくくめてたきことに思ひかしつかれ給へる
御すくせをそわかいゑまてはにほひこねとめい
ほくにおほすに又かくこの世にあまるまてひ
ひかしいとなみ給ふはおほえぬよはひのすゑ
のさかえにもあるへきかなとよろこひ〇給ふを
北方は心ゆかすものしとのみおほしたり女御
の御ましらひのほとなとにもおとゝの御よう

53オ

53ウ

いなきやうなるをいよ〳〵うらめしと思ひし
み給へるなるへし・八月にそ六条院つくりはて
てわたり給ひつしさるのまちは中宮の御
ふる宮なれはやかておはしますへしたつみ
にはとのゝおはすへきまちなり〇とらはひ
むかしの院にすみ給ふたいの御かたいぬゐ
のまちはあかしの御方とおほしおきてさせ
給へりもとありける池山をもひんなき所
なるをはくつしかへて水のおもむきやまの

をきてをあらためてさま〳〵に御かた〳〵の御
ねかいの心はへをつくらせ給へりみなみのひむ
かしは山たかく春の花の木かすをつくしてうへ
いけのさまおもしろくすくれておまへちかきせん
さい五ようこうはい桜ふちやまふきいはつゝし
なとやうのはるのもてあそひをわさとはうへて
秋のせんさいをはむら〳〵ほのかにませたり中
宮の御まちをはもとの山に紅葉の色こかる

54オ

へきうへ木ともをうへいつみの水とをくすま
ましやり水のをとまさるへきいはをたて

くはへたきおとして秋の野をはるかにつくり
たるそのころにあひてさかりにさきみたれ
たりさか野大井のわたりの野山むとくにけ
をされたる秋なりきたのひんかしはすゝしけ
なるいつみありてなつのかけによれりまへ
ちかきせんさいくれ竹した風すゝしかるへく
木たかきもりのやうなる木とも木ふかくおも
しろく山さとめきて卯花かきねことさらに
しわたしてむかしおほゆる花たちはなてし
こさうひくたになとやうの花のくさ〳〵をうへ

54ウ

て春秋の木草そのなかにうちませたりひ
むかしおもてはわけてむまはのおとゝつくりら
ちゆひて五月の御あそひ所にて水のほとり
にさうふうへしけらせてむかひにみまやして

よになき上めともをとゝのへたてたせたま
へりにしのまちはきたおもてつきわけてみ
くらまちなりへたてのかきに松の木しけ
く雪をもてあそはんたよりによせたり冬
のはしめ朝霜むすふへき菊のまかきわれ
はかほなるはゝそ原おさ〳〵名もしらぬみ山

55ウ

木とものこふかきなとをうつしうへたりひか
むのころをひわたりたまふひとたひにとさ
ためさせたまひしかとさはかしきやうなりと
て中宮はすこしのへさせたまふれいの〇夜そ（おいらかにけしきはまぬ花ちるさとそ其）
ひてうつろひ給ふ春の御しつらひはこの
ころにあはねといと心ことなり御くるま十
五御前四位五位かちにて六位殿上人な
とはさるへきかきりをえらせ給へりこちたき
ほとにはあらす世のそしりもやとはふき
給へれはなに事もおとろ〳〵しういかめし

56オ

き事はなしいまひとかたの御けしきもおさ〳〵おとしたまふ
て侍従の君そひてそなたはもてかしつきたまへはけにかうも
あるへきことなりけりとみえたり女はうのさうしまちとも
あて〳〵のこまけそおほかたのことはりもめてたかりける・
五六日すきて中宮まかてさせ給ふこの御きしきはたさは
いへといと所せし御さいはいのすくれたまへりけるをはさる
物にて御ありさまの心にくゝをもりかにおはしませは
世にをもくおもはれ給へる事すくれてなんおはしましける
このまち〳〵のなかのへたてにはへいともらうなとをとか
くゆきかよはしてけちかくをかしきあはひにしなし給へり

56ウ

なか月になれは紅葉むら〳〵色つきて宮の御まへえもい
はすおもしろし風うちふきたる夕くれに御はこのふたに
色〳〵の花紅葉をこきませてこなたにたてまつらせ給
へりおほきやかなるわらはのこきあこめしおんのをり
ものかさねてあかくちはのうす物のかさみいといたうなれ
てらうわたとのゝそりはしをわたりてまいるうるはしき
きしきなれとわらはのおかしきをなんえおほしすてさり
けるさる所にさふらひなれたれはもてなしありさま
ほかにはにすこのましうをかし御せうそこには
心から春まつそのはわかやとの紅葉をかせの

57オ

つてにたに見よわかき人〳〵御つかひもてはやすさまとも
をかし御返はこの御はこのふたにこけしきいはほなとの心はへし
て五ようの枝に
風にちる紅葉はかろし春の色をいはねの松に
かけてこそ見めこの岩ねの松もこまかにみれはえならぬ
つくり事ともなりかくとりあへすおもひより給へる
ゆへ〳〵しさなとをかしく御らんす御まへなる人〳〵もめてあ
へりおとゝこの紅葉の御せうそこいとねたけなめり春の
花さかりにこの御いらへはきこえ給へこのころ紅葉をいひくた
さんは立田ひめのおもはん事もあるをさししそきて花の

57ウ

かけに立かくれてこそつよき事はいてこめときこえ給
もいとわかやかにつきせぬ御ありさまの見所おほかるに
いとゝおもふやうなる御すまゐにてきこえかよはし給

ふ・大井の御かたはかうかた〳〵の御うつろひさたまりてかす
ならぬ人はいつとなくまきらはさむとおほして神な月
になんわたり給ける御しつらひことのありさまおとらすして
わたしたてまつり給ふひめ君の御ためをおほせはおほ
かたのさほうもけちめこよなからすいとものものしく
もてなさせたまへり

58オ

（玉かつら）

年月へたゝりぬれとあかさりし夕かほを
露わすれ給はす心〳〵なる人の有さまと
もを見給かさぬるにつけてもあらましかはと
あはれにくちおしくのみおほしいつ右近はな
にの人かすならねとなをそのかた見とみ給
てらうたき物に覚したれはふる人のかす
につかふまつりなれたり須磨の御うつろひ
のほとにたいのうへの御かたにみな人々き
こえわたし給しほとよりそなたにさふらふ心
よくかいひそめたる物に女君もおほしたれと

1オ

心のうちにはこ君ものし給はましかはあかしの
御かたはかりのおほえにはをとり給はさ
らましさしもふかき御心さしなかりけるを
たにおとしあふさすとりしたゝめ給御心な
かさなりけれはやむことなきつらにこそ
あらさらめこの御とのうつりのかすのうちに
はましらひ給なましと思ふにあかすかなしくなむ
思ける・かの西の京にとゝまりしわか君を
たに行ゑもしらすひとへに物を思つゝみ又
いまさらにかひなきことによりてわか名も

1ウ

らすなとくちかため給しをはゝかりきこえて
たつねてもをとつれきこえさりしほとに
その御めのとのおとこ少弐になりていき
けれはくたりにけりかのわか君のよつになる
としそつくしへはいきけるはゝ君の御ゆく
ゑをしらんとよろつの神仏に申てよるひる〇
こひてさるへき所々をたつねきこえけれと
つゐにえきゝ出すさらはいかゝはせむわか
君をたにこそは御かたみに見奉らめあやし
きみにそへ奉てはるかなるほとにおはせむ

2オ

ことのかなしきこと猶ちゝ君にほのめかさんと思
ひけれとさるへきたよりもなきうちには
は君のおはしけんかたもしらすたつねと
ひ給はゝいかゝきこえむまたよくもみなれ給は
ぬにおさなき人をとゝめ奉り給はんも
うしろめたかるへししりなからはたゐてくたり
ねとゆるし給へきにもあらすなとをのかしゝか
たらひあはせていとうつくしうたゝいまからけた
かくきよらなる御さまをことなるしつらひなき
舟にのせてこき出るほとはいとあはれに

2ウ

なんおほえけるおさなき心ちにはゝ君をわ
すれすおり〳〵にはゝの御もとへいくかととひ
給につけて涙たゆる時なくむすめともゝ思
こかるゝを舟みちゆゝしとかつはいさめけり・お
もしろき所〳〵を見つゝ心わかうおはせし物
をかゝる道をもみせ奉る物にもかなおはせま
しかは我らはくたらさらましと京のかたを思
やらるゝにかへり浪もうらやましく心ほそ
きにふゐこともあら〳〵しきこゑにてうら
かなしくも遠くきにけるかなとうたふをき

3オ

くまゝにふたりさしむかひてなきけり
舟人も誰をこふとかおほしまのうらかなし
けに声のきこゆる
こしかた行ゑもしらぬおきに出てあはれ
いつくに君をこふらんひなのわかれにをのかし
し心をやりていひけるかねのみさきを過て
我はわすれすなとよとゝものことくさになり
てかしこにいたりつきてはまいてはるかなるほ
とを思ひやりてこひなきて此君をかしつき
物にてあかしくらす・夢なとに玉さかに見え

3ウ

給時なともありおなしさまなる女なとそ
ひ給てみえ給へはなこり心ち〇やしくなやみ
なとしけれはなをよになくなり給にける

なめりと思ひなるもいみしくのみなん・少
弐にんはてゝのほりなんとするにはるけ
きほとにことなるいきほひなき人はた
ゆたひつゝすか〳〵しくも出たゝぬほとにおも
きやまひしてしなんとする心ちにもこの
君のとをはかりにもなり給へるさまのゆゝ
しきまておかしけなるを見奉りて我さへ

4オ

うちすて奉りていかなるさまにはふれ給は
むとすらんあやしき所にをひ出給もかたし
けなく思きこゆれといつしかも京にゐて奉
りてさるへき人にもしらせ奉らむにも都は
ひろき所なれはいと心やすかるへしと思い
そきつるをこゝなから命たゝす成ぬること
とうしろめたかるおのこゝ三人あるにたゝ此
姫君京にゐて奉るへきことを思へわか身の
けうをはな思そとなんいひをきけるそ
の人の御ことはたちの人にもしらせすたゝ

4ウ

むまこのかしつくへきゆへあるとそいひ
なしけれは人にみせすかきりなくかしつき
きこゆるほとにはかにうせぬれは哀に心ほ
そくてたゝ京のいてたちをすれとこの
少弐のなかあしかりけるくにの人おほくな
としてとさまかうさまにおちはゝかりて我
にもあらて年をすくすに此君ねひとゝ
のひ給まゝにはゝ君よりもまさりてき
よらにちゝおとゝのすちさへくはゝれはにやし
なたかくうつくしけなり心はせおほとかにあ

5オ

らまほしうものし給きゝついつゝすいたる
ゐなか人とも心かけせうそくかるいとおほ
かりゆゝしくめさましくおほゆれはたれ
たれもきゝ入すかたちなとはさても有ぬへ
けれといみしきかたはのあれは人にもみせ
すあまな（ママ）なしてわかよのかきりはもたらむと

いひちらしたれはこ少弐のむまこはかたは
なんあんなるあたら物をといふきくもゆゝ
しくいかさまにして都にゐて奉りてちゝお
とゝにしらせ奉らむいときなきほとをいと

5ウ

らうたしと思きこえ給へりしかはさりと
もをろかには思すてきこえ給はしなといひ
なけく仏神に願をたてゝなんねんしける・
むすめともゝおのことももゝ所につけたる
よすかとも出きてすみつきにたり心の
うちにこそいそき思へと京のことはいやとを
さかるやうにへたゝりゆく物覚しる
まゝによをいとうき物に覚して年三な
とし給廿はかりになり給まゝにおいとゝ
のほりていとあたらしくめてたしこのすむ

6オ

所はひせんのくにとそいひけるそのわたり
にもいさゝかよしある人はまつこの少弐の
むまこの有さまをきゝつたへてなをた
えすをとつれくるもいといみしうみゝ
かしかましきまてなむ・大夫のけむとて
ひこのくにゝはそうひろくてかしこにつけて
はおほえありいきおひいかめしきつは物有
けりむくつけき心のなかにいさゝかすきた
る心のましりてかたちある女をあつめて
みむと思ける此姫君をきゝつけていみし

6ウ

きかたわありとも我はみかくしてもたらん
といとねん比にいひかゝるをいとむくつけ
く思ていかてかゝることをきかてあまに成な
むとすといはせたりけれはいよ〳〵あやう
かりてをしてこの国にこえきぬこのおの〇
ともをよひとりてかたらふことは思ふさまに
なりなはおなし心にいきほひをかはすへき
ことなとかたらふにふたりはおもむきにけり
しはしこそにけなくあはれと思きこえけれ

をの〳〵わか身のよるへとたのまんにいとた

のもしき人なりこれにあしくせられては
此ちかきせかいにはめくらひなんやよき人の
御すちといふともおやにかすまへられ奉ら
すよにしられてはなにのかひかはあらんこ
の人のかくねん比にきこえ給へるこそいまは
御さいわ(は)ひなれさるへきにてこそはかゝるせか
ひにもおはしけめにけかくれ給ともなにのた
けきことかはあらんまけしたましゐにいかり
なはせぬことゝもしいてんといひおとせは
いといみしときゝてなかのこのかみなるふこ

のすけなんなをいとたい〳〵しくあたらし
きことなりこ少弐のの給ひしこともあり
とかくかまへて京にあけ奉りてむといふ
むすめともゝなきまとひてはゝ君のかひ
なくてさすらへ給て行ゑをたにしらぬ

7オ

7ウ

かはりに人なみ〳〵にて見奉らむとこそ思
ふにさる物のなかにましり給なんことゝ思
なけくをもしらて我はいと覚えたかき
身と思ひてふみなとかきてをこすてなと
きたなけなうかきてからのしきしかうはし

きかうにいれしめつゝおかしくかきたりと
思たること葉そいとたゝ(たゝみたりイ)さりけるみつ
からもこの家のしらうをかたらひとりてう
ちつれてきたり三十はかりなるおのこの
たけたかく物〳〵しくふとりてきたな
けれと思ひなしうとましくあららかなるふる
まひなとみるもゆゝしくおほゆ色あひ心地
よけにこゑいたうかれてさへつりゐたりけさ
う人はよにかくれたるをこそよはひとはいひ
けれさまかへたる春の夕くれなり秋ならねと

もあやしかりけりとみゆ心を小(や)ふらしと

8オ

8ウ

てをはおとゝいてあふこ少弐のいとなさけ
ひきら〳〵しく物し給しをいかてかあひかた
らひ申さむと思給〇しかともさる心さしをも見
せきこえす侍し程にいとかなしくてかくれ
給にしをそのかはりにいかうにつかうまつる
へくなん心さしをはけましてけふはいとひ
たふるにしゐてさふらひつるこのおはしま
すらん女君すちことにうけ給はれはいとかた
しけなしたゝなにかしらかわたくしの君と

9オ

思まうしていたゝきになんさゝけ奉るへき
おとゝもしふ〳〵におはしけなる事はよから
ぬ女なともあまたあひしりて侍をきこし
めしうとむなゝりさりともすやつはらを
ひとしなみにはし侍なんやわか君をはきさ
のくらゐにおとし奉らし物をやなといとよけ
にいひつゝくいかゝはかくの給をいとさいわい
ありとはおもひ給ふるをすくせつたなき

人にや侍らむ思はゝかること侍りていかてか
人に御覧せられむと人しれすなけき

9ウ

侍めれは心くるしう見給へわつらひぬると
いふさらにな覚しはゝかりそ天下にめつふ
れあしをれ給へりとも何かしはつかうまつりや
めてん国のうちの仏神はをのれになんなひ
き給へるなとほこりゐたりそのひはかり
といふにこの月はきのはてなり〇ゐなかひた
ることをいひのかるおりていくきはにうた
よまゝほしかりけれはやゝひさしう思めくらして
君にもし心たかはゝまつらなるかゝみの神を
かけてちかはんこの和哥はつかうまつりたり

10オ

となん思ひ給るとなんうちゑみたるもよつ
かすうゐ〳〵しやあれにもあらねはかへ
しすへくもおもはねとむすめともによます
れとまろはまして物も覚えすとてゐ

たれはいとひさしきに思わつらひてうち
おもひけるまゝに
　年をへていのる心のたかひなはかゝみの
神をつらしとやみむとわなゝかし出たるをまてやこはいかにおほさるゝとゆくりかにより
きたるけはひにおひえておとゝ色もなく

10ウ

成ぬむすめたちはさはいへと心つよくわ
らひて此人のさまことに物し給をひきたか
へ侍らはつらく思はれんを猶ほけ〳〵しき人
のかみかけてきこえひかめ給なめりやとゝ
ききかすおいさり〳〵とうなつきておかしき
御くちつきかななにかしらゐ中ひたりと
いふなこそ侍れくちおしきたみには侍ら
す都の人とてもなにはかりかあらんみな
しりて侍りなをな覚しあなつりそと
てまたよまむと思つれともたへすやあり

11オ

けむいぬめり・しらうかかたらひとられたる
もいとおそろしく心うくて此ふこのすけ
をせむれはいかゝはつかうまつるへからむか
たらひあはすへき人もなしまれまれのは
らからはこのけんにおなし心ならすとてな
かたかひにたりこのけんにあたまれては
いささかの身みしろきせむも所せくなむあ
るへきなか〳〵なるめをやみむと思ひわつ
らひにたれと姫君の人しれすおほいた
るさまのいと心くるしくていきたらしと

思しつみ給へることはりとおほゆれはい
みしきことを思かまへて出たついもうとた
ちもとし比へぬるよるへをすてゝこの御と
もに出たつあてきといひしはいまは兵
部の君といふそそひてよるにけ出て舟
にのりにける・大夫のけんはひこにかへりい
きて四月廿日のほとに日とりてこんとす

11ウ

るほとにかくてにくる成けりあねおもとは
るいひろくなりてえ出たゝすかたみに
わかれおしみてあひみんことのかたきを思ふに

12オ

としへぬるふるさと辷(と)てことにすてかたき
こともなしたゝまつらのみやのまへのすき(な)
さとかのあねおもとのわかるゝをなん帰りみ〇(せ)
られてかなしかりける

うき島をこきはなれても行かたやいつくと
まりとしらすも有かな

行さきもみえぬ浪路に舟出して風にま
かする身こそうきたれいと跡はかなき心ち
てうつふしふし給へりかくにけぬるよしをの
つからいひいてつたへはまけしたましゐに

12ウ

てお(を)ひきなんと思に心もまとひてはや舟
といひてさまことになんかまへたりけれは思
かたの風さへすゝみてあやうきまてはし

りのほりぬひゝきのなたもなたらかに
過ぬかいそくの舟にやあらんちいさき舟の
とふやうにてくるなといふ物ありかいそ
くのひたふるならんよりもかのをそろし
き人のおひくるにやと思ふにせんかたなし

うきことにむねのみさはくひゝきにはひゝ
きのなたもさわ(はら)さ(なのみなりけりイ)りけりお(か)はしりと

13オ

いふ所ちかつきぬといふにそすこしいき出る
心ちするれいのふなこともからす(と)まりよ
りかはしりをすほとはとうたふこゑのなさ
けなきもあはれにきこゆふこのすけ哀に
なつかしううたひすさひていとかなしきめ
こもわすれぬとて思へはけにそみなうちす
てゝけるいかゝ成ぬらんはか〳〵しく身のたす
けと思ふらうとうともはみなゐてきにけ
り我をあしと思てお(を)ひまとはしていかゝし
なすらんと思に心おさなくも帰りみせて出

13ウ

にけるかなとすこし心のとまりてそあさま
しきことを思つゝくるに心よはくうちなかれぬ
胡の地のせいしをはむなしくすて〳〵つと
すするを兵部の君きゝてけにあやしのわ
さや年比したかひきつる人の心にもにはか
にたかひてにけ出にしをいかに思らんとさ
ま〳〵思つゝけらる帰るかたとてもそのと
ころといきつくへきふるさともなししれる
人といひよるへきたのもしき人も覚えす
たゝ一所の御ためによりこゝらの年月す

14オ

みなれけるせかひをはなれてうかへる浪
風にたゝよひて思めくらすかたなしこの人
をもいかにし奉らむとするそとあきれてお
ほゆれといかゝはせむとていそき入ぬ・九条
にむかししれりける人の残りけるをとふらひ
出てそのやとりをしめをきて都のうちと

いへともはか〳〵しき人のすみたるわたりに
もあらすあやしきいちめあき人のなかにて
いふせく世の中を思つゝ秋にもなるまゝに
きしかた行さきかなしきことおほかりふこの

14ウ

すけといふたのもし人もたゝ水鳥のくか
にまとへる心ちしてつれ〳〵にならはぬ有
さまのたつきなきをみるに帰らんにも
はしたなく心おさなく出たちけるを思ふ
にしたかひきたりし物ともゝるいにふれ
てにけさりもとの国に帰りちりぬす
みつくへきやうにもなきをはゝおとゝ明
くれなけきいとをしかれはなにかこの身はい
とやすく侍り人ひとりの御身にかへ奉り
ていつちも〳〵まかりうせなむにとかある

15オ

まし我らいみしきいきをひに成ても
わかきみをさる物のなかにはふらし奉り

てはなに心ちかせましとかたらひなくさめて神仏こそはさるへきかたにもみちひきしらせ奉り給はめちかきほとにやはたのみやと申はかしこにてもまいり祈り申給しまつらはこさきおなしやしろなりかのくにをはなれ給とてもおほくの願たて申給ふきいま都を帰りてかくなん御しるしをえてまかりのほりたるとはやく申給へとてやはたにまうてさせ奉るそのわたりしれる人にいひ尋てこしとてはやくおやのかたらひし大とくゆのこれるをよひとりてまうてさせ奉りうちつきては仏の御なかにははつせなん日の本のうちにはあらたなるしるしあらはし給ともろこしにたにきこえあんなりましてわか国のうちにこそ遠きくにのさかひとてもとしへ給つれはわか君をはましてめくみ給てんとて出し奉ることさらにかちよ

15ウ

りとさためたりならはぬ心ちにいとわひしくくるしけれと人のいふまゝに〇おほえてあゆみ給いかなるつみふかき身にてかゝるよにさすらふらんわかおやよになくなり給へりともわれをあはれとおほさはおはすらむ所にさそひ給へもし世におはせは御かほみせ給へと仏をねんしつゝ有けんさまをたに覚えねはたゝおやをはせましかはとはかり〇かなしさをなけきわたり給へるにかくさしあたりて身のわりなきまゝにとりかへしいみしく覚えつゝからうしてつはいちといふ所に

四日といふみの時はかりにいける心ちもせていきつき給へりあゆむともなくとかくつくろひたれとあしのうらうこかれすわひしけれはせんかたなくてやすみ給このたのもし人なるすけゆみやもちたる人ふたりさてはし

16オ

16ウ

もなるものわらはなと三四人をむなは
らあるかきり三人つほさうそくしてひす
ましめく物ふるきけす女ふたりはかりとそ
あるいとかすかに忍ひたり・おほみあかし
のことなとこゝにてしくはへなとする程に

17オ

日くれぬ・家あるしのほうし人やとし奉らむと
する所になに人のものし給そあやしき女
ともの心にまかせてとむつかるをめさましく
きくほとにけに人々きぬこれもかちよりな
めりよろしき女ふたりしも人ともそおとこ
女かすおほかむめるむまよついつゝひかせて
いみしく忍ひやつしたれときよけなる
おとこともなともありほうしはせめてこゝに
やとさまほしくしてかしらかきありくいとをし
けれとまたやとりかへんもさまあしくわゐらは

17ウ

しけれは人々はおくにいり外にかくしなと
してかたへはかつかたによりぬせしやうなと
ひきへたてゝおはしますこのくる人もはつ
かしけもなしいたうかいひそめてかたみに心つ
かひしたりさるはかのよとゝもにこひなく
右近成けり・とし月にそへてはしたなき
ましらひのつきなく成行身を思ひなやみ
てこのみてらになむたひ〳〵まうてける
れいならひにけれはかやすくかまへたりけ
れとかちよりあゆみたへかたくてよりふした

18オ

るに此ふ〇このすけ〇なりのせんしやう〇もと
によりきてまいりものなるへしをしきて
つからとりてこれは御まへにまいらせ給へ御
たいなとうちあはていとかたはらいたしや
といふをきくにわかなみの人には〇しと思て
物のはさまよりのそけはこのおとこのかほ
みし心ちすたれ〇はえおほえすいとわかゝりし
ほとをみしにふとりくろみてやつれたれ

はおほくのとしへたてたるめにはふとしも見
わかぬなりけり三条こゝにめすとよひよす

18ウ

る女をみれはまたみし人なりこ御かたにし
も人なれとひさしくつかうまつりなれて
かのかくれ給へりし御すみかまてありし
物なりけりとみなしていみしく夢のや
うなりしうとおほしき人はいと〇けれと
みゆへくもかまへす思わひて此女にとはん
兵とうたといひし人もこれにこそあら
めひめ君のおはするにやと思よるにいと
心もとなくてこのなかへたてなる三条を
よはすれとくひ物に心入てとみにもこぬ

19オ

いとにくしとおほゆるもうちつけなりやからう
しておほえすこそ侍れつくしのくにゝはた
とせはかりへにけるけすの身をしら せ給へ
き京人よ人たかへにや侍らんとてよりきたり
ゐなかひたるかいねりにきぬなときてい
といたうふとりにけりわかよはひもいとゝおほ
えてはつかしけれとなをさしのそけ我をは
見しりたりやとてかほをさし出たり此女てを
うちてあかおもとにこそおはしましけれあなう
れしともうれしいつくよりまいり給ひたるそ

19ウ

うへはおはしますやといとおとろ〳〵しくなく
わかま物にて見なれしよを思出るにへたて
きにけるとし月かそへられていとあはれなり
まつおとゝはをはすやわか君はいかゝ成給に
しあてきときこえしはとて君の御ことは
いひ出すみなおはします姫君もおとな
になりておはしますまつおとゝにかくなむ
ときこえんとて入ぬみなおとろきて夢の
心ちもするかないとつらくいはむかたなく
思きこゆる人にたいめしぬへきことよと〇

20オ

此へたてによりきたりけとをくへたてつ
るひやうふたつものなこりなくをしあけて
まついひやるへきかたなくなきかはすおい
人はたゝわか君はいかゝ成給にしこゝらのと
し比夢にてもおはしまさむ所をみんと大願
をたつれとはるかなるせかひにて風の音に
てもえきゝつたへ奉らぬをいみしくかなしと
思ふにおいの身の残りとゝまりたるもいと
心うけれとうちすて奉り給へるわか君の
らうたく哀にておはしますをよみちの

20ウ

ほたしにもてわつらひきこえてなむまたゝ
き侍といひつゝくれはむかしそのおりいふかひ
なかりしことよりもいらへんかたなくわつら
はしと思へとも御かたははやうせ給にきと
いふまゝに二三人なからむせかへりいとむつ
かしくせきかねたり・日くれぬといそきて
みあかしのことゝもしたゝめはてゝいそかせ

は中〳〵いと心あはたゝしくて立わかるもろ
ともにやといへとかたみにともの〇あやしと
思ふへけれはこのすけにもことのさまたに

21オ

いひしらせあへす我も人もことにはつかしく
もあらてみなおりたちぬ右近は人しれ
すめとゝめてみるになかにうつくしけなる
うしろ手のいといたうやつれてうつきのひ
とへめく物にきこめ給へるかみのすきかけい
とあたらしくめてたくみゆ心くるしうかなし
と見奉るすこしあしなれたる人はとくみた
うにつきにけりこの君をもてわつらひき
こえつゝそやおこなふほとにそのほり給へる
いとさはかしく人まうてこみてのゝしる右近

21ウ

かつほねは仏の右のかたにちかきまにした
りこの御しはまたふかゝらねはにやにしの
まに遠かりけるを猶こゝにおはしませと

たつねかはしいひたれはおとことをは
とゝめてすけにかう〳〵といひあはせてこ
なたにうつし奉る・かくあやしき身なれと
たゝいまの大とのになんさふらひ侍れは
かくかすかなるみちにてもらうかはしきこ
とは侍らしとたのみ侍るゐ中ひたる人を
はかやうの所にはよからぬなま物とものあ

22オ

なつらはしうするもかたしけなきことなり
とて物語いとせまほしけれとおとろ〳〵し
きおこなひのまきれさはかしきにもよを
されて仏おかみ奉る右近は心のうちに此人
をいかてたつねきこえむと申わたりつるに
かつ〳〵かくて見奉れはいまは思のことおと
との君のたつね奉らむの御心さしふかゝめる
にしらせ奉りてさいはいあらせ奉り給へな
と申けり・くに〳〵よりゐ中人おほくまうて
たりけり此国のかみのきたのかたもまうて

たりけりいかめしくいきほひたるをうらやみ
て此三条かいふやう大ひさにはこと事も
申さしあかひめ君大弐の北のかたならすはた
うこくのすりやうの北のかたになし奉らむ
三条らもすいふんにさかへてかへり申はつかう
まつらんとひたひにてをあてゝねんし入てを
り右近いとゆゝしくもいふかなときゝてい
といたくこそゐ中ひにけれな中将とのは
むかしの御おほえたにいかにおはしましし
していまはあめのしたを御心にかけ給へる

22ウ

大臣にていかはかりいつかしき御なかに御かた
しもすりやうのめにてしなさたまりておは
しまさむよといへはあなかま給へ大臣たち
もしはしまて大弐のみたちのうへのし水の
みてらゆくはんせをんしにまいり給しいきを
ひはみかとのみゆきにやはをとれるあなむく

23オ

つけにてをさらにてをひきはなたす
おかみ入てをり・つくし人は三日こもらむと心
さし給へり右近はさしも思はさりけれと
かゝるつゐてのとかにきこえむとてこもるへ

23ウ

きよし大とこよひていふ御あかしふみなとかき
たる心はへなとさやうの人はくた〳〵しう
わきまへけれはつねのことにてれいのふち
はらのるりきみといふか御ためにに奉るよく
いのり申給へその人此比なむみ奉り出た
るその願もはたし奉るへしといふをきくも
哀なりほうしいとかしこきことかなたゆみ
なくいのり申侍りししるしにこそ侍れといふ
いとさはかしうよひと夜おこなふなりあけ
ぬれはしれる大とこのはうにおりぬ物かた

24オ

り心やすくとなるへし・姫君のいたくやつ
れ給へるはつかしけに覚したるさまいとめ
てたくみゆおほえぬたかきましらひをして
おほくの人をなん見あつむれとととのゝうへ
の御かたちにる人おはせしとなむ
とし比見奉るをまたおいいて給ひめ君
の御さまいとことはりにめてたくお
はしますかしつき奉り給さまもなら
ひなかめるにかうやつれ給へるさまのお
とり給ましくみえ給は有かたうなむ

24ウ

おとゝの君ちゝ御かとの御ときよりそこらの
女御きさきそれよりしもは残るなくみた
てまつりあつめ給へる御めにもたうたいの
御はゝきさきときこえしと此姫君の御かた
ちとをなむよき人とはこれをいふにやあら
むとおほゆるときこえ給見奉りならふるに
かのきさきの宮をはしりきこえす姫君
はきよらにおはしませとまたかたなり
にておいさきそをしはかられ給うへの御か

たちはなをたれかならひ給はんとなん見

給とのもすくれたりと覚しためるをことに
いてゝはなにかはかそへのうちにはきこえ
給はむ我にならひ給へるこそ君はおほけな
けれとなむたはふれきこえ給見奉れる
に命のふる御ありさまともを又さるたくひ
おはしましなんやとなん思侍るにいつくかをとり給はむ物はかきりある物なれはすくれ給
へりとていたゝきをはなれたる光やはおはす
するたゝこれをすくれたりとはきこゆへき
なめりかしとうちゑみて見奉れはおひ人も

25オ

うれしと思ふ・かゝる御さまをほと〳〵あやしき所
にしつめ奉りぬへかりしにあたらしくかなし
くていゑかまとをもすておとこ女のたのむ
へきこと〳〵にもひきわかれてなん帰りしらぬ
よの心ちする京にまうてこしあかおもとはや

25ウ

よきさまにみちひききこえ給へたかきみや
つかへし給人はをのつからゆきましりたる
たよりものし給らんちゝおとゝにきこしめさ
れかすまへられ給へきたはかり覚しかまへ
よといふはつかしうおほいてうしろむき給へ

り・いてや身こそかすならねともとのもお
まへちかくめしつかひ給へはものゝおりことに
いかにならせ給にけんときこえ出るをきこし
めしをきてわれいかてたつねきこえん
と思ふをききいていて奉りたらはとなむ
の給はするといへはおとゝの君はめてたく
おはしますともさる小むことなき御めとも
おはしますなりまつまことのおやとおはする
おとゝにをしらせ奉り給へなといふにありし
さまなとかたり出てよにわすれかたくかな

26オ

しきことになむおほしてかの御かはりに見奉

26ウ

らん子もすくなきかさう〳〵しきにわかこを
たつね出たると人にはしらせてとそのかみ
よりの給なり心のおさなかりけることはよ
ろつに物つゝましかりし程にてえたつね
てもきこえ〇すくしゝほとに少弐になり給へ
るよしは御なにてしりにきまかり申にとのに
まいり給しにほのみ奉りしかともえきこえ
てやみにきさりとも姫君をはかのありし
夕かほの五条にそとゝめ奉り給へらんとそ

27オ

思しあないみしやゐなか人にておはしまさま
しよなとうちかたらひつゝ日ひとひむかし物
語ねんすなとしつゝまいりつとふ人の有さま
とも見くたさるゝかたなりまへよりゆく水を
は初瀬河といふなりけり右近
　ふたもとの杉のたちとを尋すはふる川のへ
に君を見ましやうれしきせにもときこゆ
　はつせ河はやくのことはしらねともけふの逢瀬
に身さへなかれぬとうちなきておはするさま
いとめやすしかたちはいとかくめてたくきよけ

27ウ

なからゐ中ひこち〳〵しうおはせましかはいか
にたまのきすならましいてあはれいかて
かくおいいて給けんとおとゝをうれしく思ひはゝ
君はたゝいとわかやかにおほとかにてやは〳〵
とそたをやき給へりしこれはけたかくもて
なしなとはつかしけによしめき給へりつくしを
心にくゝ思なすにみな見し人はさとひにたる
に心えかたくなむ・くるれはみたうにのほり
てまたの日もおこなひくらし給秋風たによ
りはるかに吹のほりていとはたさむきに

28オ

物いとあはれなる心ともにはよろつ思つゝけら
れて人なみ〳〵ならんことも有かたきことゝ
思しつめつるを此人の物語のつゐてにちゝ
おとゝの御有さまはら〳〵のなにとにもあるまし

き御こともみな物めかしなしたて給をきけはかゝ
るしたくさたのもしくそ覚し(し)なりぬる・い
つとてもかたみにやとる所もとひかはしてもし
またをひまとはしたらむ時とあやうく思けり
右近か家は六条院ちかきわたりなりけれは
ほと遠からていひかはすもたつきいてき

28ウ

ぬる心ちしけり・右近は大とのにまいりぬこ
の事をかすめきこゆるついてもやとてい
そくなりけりみかとひきいるゝよりけはひ
ことにひろ〳〵としてまかてまいる車おほく
まよふかすならて立いるもまはゆき心ち
する玉のうてなゝり・そのよは御まへにもまい
らて思ふしたりまたの日よへさとよりまい(ま)
れる上らうわか人とものなかにとりわきて右
近をめしいつれはおもたゝしくおほゆおとゝ
も御らんしてなとかさとゐはひさしくしつる

29オ

れいならすやまめ人のひきたかへこまかへ
るやうもありかしおかしき事なとあり
つらんかしなとれいのむつかしうたはふれこと
なとの給まかてなぬかにすき侍ぬれとお
かしきことは侍かたくなむやまふみし侍りて
あはれなる人をなむ見奉りつけたりしな
に人そととひ給(ふ)ふときこえいてむもまた
うへにきかせ奉らてとりわき申たらんをのち
にきゝ給ふてはへたてきこえけりなと
やおほさむなと思みたれていまきこえさせ

29ウ

侍らんとて人々まいれはきこえさしつ・御とのあふ
らなとまいりてうちとけならひおはします
御有さまともいとみるかひおほかり女君は廿七
八にはなり給ひぬらんかしさかりにきよらにね
ひまさり給へりすこしほとへて見奉るは
またこのほとにこそにほひくはゝり給にけり(れィ)
とみえ給かの人をいとめてたしをとらしと(お)

見奉りしかと思なしにやなをこよなきに
さいわひのあるとなきとはへたてあるへきわ
さかなとみあはせらるおほとのこもるとて

30オ

右近〇御あしまいりにめすわかき人はくるしとて
むつかるめり猶としへぬるとちこそ心かはし
てむつひよかりけれとの給へは人々忍ひて
わらふさりやたれかそのつかひならひ給は
むをはむつからむうるさきたはふれことといひ
かゝり給をわつらはしきになといひあへり・
うへも年へぬるとちうちとけすきははたむ
つかり給はむとや・さるましき心とみねはあや
うしなとうこむにかたらひてわらひ給いとあ
ひきやうつきおかしきけさへそひ給へり・いま〇

30ウ

大やけにつかへいそかしき御有さまにもあらぬ
御身にて世の中ののとやかにおほさるゝまゝ
にたゝはかなき御たはふれことをの給〇おかしく
人の心をみ給あまりにかゝるふる人をさへ
そたはふれ給・かの尋出たりけむやなにさま
の人そたうときすきやうさかたらひて〇
きたるかととひ給へはあな見くるしやはかな
くきえ給にし夕かほの露の御ゆかりをなん
見給へつけたりしときこゆる〇に哀なり
けることかなとし比はいつくにかとの給へはあり

31オ

のまゝにはきこえにくゝてあやしきやまさと
になんむかし人もかたへはかはらて侍りけれは
その世の物語し出侍てたへかたく思ひ給へ
りしなときこえゐたりよし心しり給はぬ御
あたりにとかくしきこえ給へはうへあなわつ
らはしねふたきにきゝいるへくもあらぬ物を
とて御袖して御みゝふたき給ひつ・かたち
なとはかのむかしの夕かほとをとらしやなと
の給へはかならすさしもいかてかものし給
はむと思ひ給しをこよなうこそおいまさりて

みえ給しかときこゆれはおかしのことやたれは
かりとおほゆ此君とゝのたまへはいかてかさま
てはときこゆれはしたりかほにこそ思へけれ
我にゝたらはしもうしろやすしかしとおやめき
ての給かくきゝそめ給てのちはめしはなち
つゝさらはかの人此わたりにわたい奉らんと
し比ものゝついてことにくちおしうまとはし
つることを思出つるにいとうれしくきゝいて
なからいまゝておほつかなきもかひなきこと
になむちゝおとゝにはなにかしられんいと

31ウ

あまたもちさはかるめるか数ならていまはし
め立ましりたらむかなか〳〵なることこそ
あらめ我はかうさう〳〵しきにおほえぬ所
よりたつねいたしたるともいはむかしすき物
とものの心つくさするくさはひにていといたう
もて猶さむなとかたらひ給へはかつ〳〵いとうれ

32オ

しく思つゝたゝ御心になむおとゝにしらせ
奉らむともたれかはつたへほのめかし給はむいた
つらにすき物し給しかはりにはともかくもひき
たすけさせ給はむことこそはつみかるませ給は

32ウ

めときこゆいたうもかこちなすかなとほゝゑ
みなから涙くみ給へり・あはれにはかなかりける
契りとなむとし比思ひわたるかくてつとへたる
かた〳〵の中にかのおりの心さしはかり思とゝ
むる人なかりしを命なかくてわか心なかま
をも見はつるたくひおほかむめる中にいふ
かひなくてうこむはかりをかたみにみるはくち
おしくなん思ひわするゝ時なきにさてものし給
はゝいとこそほいかなふ心ちすへけれとて御せ
うそこ奉り給かのすゑつむ花のいふかひ

33オ

なかりしを覚し出れはさやうにしつみておい
出たらむ人の有さまうしろめたくてまつふみの

けしきゆかしうおほさるゝ成けり物まめやかに
あるへかしくかき給てはしにかくきこゆるを
　しらすともたつねてしらんみしま江におふる
みくりのすちはたえしをとなん有ける御ふ
みみつからまかてゝの給さまなときこゆ・御さ
うそく人々のれうなとさま〳〵ありうへにも
かたらひきこえ給へるなるへしみくしけ殿な
とにもまうけの物めしあつめて色あひしさま

33ウ

なとことなるをとえらせ給へれはゐなかひ
たるめともにはましてめつらしきまてなん思
ける・さうしみはたゝかことはかりにてもまことの
おやの御けはひならはこそうれしからめいかてか
しらぬ人の御あたりにはましらはむとおもむ
けてくるしけに覚したれとあるへきさまを
右近きこえしらせ人々〇をのつからさて人たち
給なはおとゝの君もたつねしりきこえ給なん
おやこの御ちきりはたえてやまぬものなり

右近かかすにも侍らすいかてか御覧しつけ
られんと思ふ給へしたに仏神の御みちひき侍
らさりけりやまして誰も〳〵たいらかにたにおは
しまさはとみなきこえなくさむまつ御返り
をとせめてかゝせ奉るいとこよなくゐなか
ひたらん物をとはつかしくおほいたりからのかみ
のいとかうはしきをとり出てかゝせ奉る
　数ならぬみくりやなにのすちなれはうきにし
もかくねをとゝめけんとのみほのかなりてはは
かなたちてよろほはしけれとあてはかにてく
ちおしからねは御心おちゐにけり・すみ給へき

34オ

御かた御覧するにみなみのまちにはいたつら
なるたいともなともなしいきほひことにすみ
みち給へれはけせうに人しけくもあるへし
中宮のおはしますまちはかやうの人も
すみぬへくのとやかなれとさてさふらふ人

34ウ

のつらにやきゝなされんと覚してすこしむ
もれたれとうしとらのまちのにしのたい
ふとのにてあるをことかたへうつしてとおほ
すあいすみにもしのひやかに心よくものし
給御かたなれはうちかたらひても有なむ

とおほしをきつ・うへにもいまそかのありしむか
しのよの物語きこえ出給ふけるかく御心に
こめ給ことありけるをうらみきこえ給ふわ
りなしやよにある人のうへとてやとはすかた
りはきこえいてむかゝるついてにへたてぬこ

そは人にはことには思きこゆれとていとあは
れけに覚しいてたり・人のうへにてもあまた
みしにいとおもはぬなかも女といふものゝ心ふか
きをあまた見きゝしかはさらにすき〳〵しき
心はつかはしとなん思ひしををのつからさるまし

35オ

35ウ

きをもあまたみしなかにあはれとひたふるにら
うたきかたはまたたくひなくなむ思出らるゝ
よにあらましかは北のまちに物する人のな
みにはなとか見さらまし人のありさまとり〳〵
になむ有けるかと〳〵しうおかしきすちなと
はをくれたり〻しかともあてはかにらうたくも
ありしかなとの給さりともあかしのなみに
はたちならへ給はさらましとの給なを北
のおとゝをはめさましと心をき給へり姫君
のいとうつくしけにてなに心もなくきゝ給

からうたけれはまたことはりそかしと覚し
かへさる・かくいふは九月のことなりけりわたり
給はんことすゝ〳〵しくもいかてかはあらんよろし
きわらはわか人なともとめさすつくしにて
はくちおしからぬ人々も京よりちりほひきた
るなとをたよりにつけてよひあつめなとし
てさふらはせしもにはかにまとひ出給しさは

36オ

きにみなをくらしてけれは又人もなし京はを
のつからひろき所なれはいちめなとやうの
物いとよくもとめつゝいてくその人の御こなと

はしらせさりけりうこむかさとの五条にまつ
忍ひてわたし奉りて人々えりとゝのへさう
そくとゝのへなとして十十月(ヰ)にそわたり給・おと
と東の御方にきこえつけ奉り給あはれと
思し人のものうしてはかなき山里にかくれ
ゐにけるをおさなき人の有しかはとし比
も人しれす尋侍りしかともえきゝいてゝ
なん女になるまてすきにけるを覚え
ぬかたよりなんきゝつけたる時にたにとて
うつろはし侍なりはゝもなく成にけり中将を

36ウ

きこえつけたるにあしくやはあるおなしこ
とうしろみ給へ山かつめきておいいてたれは
ひなひたることおほからむさるへくことにふれ

てをしへ給へといとこまやかにきこえ給・けに
かゝる人のおはしけるをしりきこえさりける
よ姫君のひと所ものし給かさう〳〵しきに
よきことかなとおいらかにの給かのおやなりし
人は心なん有かたきまてよかりし御心も
うしろやすく思きこゆれはなとの給つき〳〵
しくうしろむ人なともことおほからて・つれ〳〵

に侍るをうれしかるへきことになむとの給・とのゝ
内の人は御むすめともしらてなに人また
尋出給へるならんむつかしきふる物あつかひ
かなといひけり・御くるま三はかりして人の
すかたともなと右近あれはゐなかひすし
たてたり(たヰ)とのよりそあやなにくれと奉
給へるそのよやかておとゝの君わたり給へ
りむかし光けんしなといふなはきゝわたり奉
りしかと年比のうゐ〳〵しさにさしも思き
こえさりけるをほのかなるおほとなふらにみ(み)

37ウ

き丁のほころひによりはつかに見奉るいとゝ
おそろしくさへそおほゆるやわたり給かたのと
を右近かいはなては此とくちにいふるへき人は
心ことにこそとわらひ給てひさしなるおまし
についゐ給て火こそいとけさうひたる心ち
すれおやのかほはゆかしき物とこそきけさ
もおほさぬかとてき丁すこしをしやり給
わりなくはつかしけれはそはみておはする
やうたいなといとめやすくていますこし光
見せむやあまり心にくしとの給へは右近

38オ

かゝけてすこしよすおもなの人やとすこし
わらひ給けにとおほゆる御まみのはつかし
けさなりいさゝかもこと人とへたてある
さまにもの給なさすいみしくおやめきて・
年比御ゆくゑをしらて心にかけぬひまなく
なけき侍をかうて見奉るにつけても夢

38ウ

の心ちして過にしかたのことゝもとりそへ忍ひ
かたきにえなんきこえられさりけるとて御
めをしのこひ給まことにかなしう覚し出らる
御としの程かそへ給ふておやこのなかのかくとし

39オ

へたるたくひあらしものを契りつらくもあり
けるかないまは物うゐ〳〵しくわかひ給へき
御ほとにもあらしをとし比の御物語なともきこ
えまほしきになとかおほつかなくはとうら
み給にきこえむこともなくはつかしけれはあし
たゝすしつみそめ侍にけるのちなにことも
あるかなきかになとほのかにきこえ給こゑそ
むかし人にいとよく覚えてわかひたりける
ほゝゑみてしつみ給へりけるを哀ともいまは
又たれかはとて心はへいふかひなくはあらぬ御い

39ウ

らへと覚す右近にあるへきことのたまはせて
わたり給ぬめやすくものし給をうれしく覚し

てうへにもかたりきこえ給さる山かつの中に
としへたれはいかにいとをしけならんとあな
つりしを歸(かへ)りて心はつかしきまてなんみゆ
るかゝる物有といかて人にしらせて兵部卿
の宮なとの此まかきのうちこのましうし給
心みたりにしかなすきものともいとうる
はしたちてのみ此わたりにみゆるもかゝる物の
くさはひのなきほとなりいたうもてなして

40オ

しかななをうちあはぬ(はイ)人のけしき見あつ
めむとの給へは・あやしの人のおやゝまつ人の
心は(は)けまさむことをさきにおほすよけしか
らすとの給・まことに君をこそいまの心ならまし
かはさやうにもてなしてみつへかりけれいと
むしんにしなしてしわさそかしとてわらひ給に
おもてあかみておはするいとわかくおかしけなり
すゝりひきよせ給ふて手ならひに
　恋わたる身はそれなれと玉かつらいかなるすち
をたつねきつらんあはれとやかてひとり

40ウ

こち給へはけにふかく覚しける人のなこり
なめりと見給・中将の君にもかゝる人を尋出
たるをようゐしてむつひとふらへとの給けれ
はこなたにまうて給て人かすならすともかゝ
る物さふら(ら)ふとまつめしよすへくなん侍ける
御わたりのほとにもまいりつかふまつらさり
けること、いとまめまめしうきこえ給へは
かたはらいたきまて心しれる人はおもふ・心の
かきりつくしたりし御すまゐなりしかと
あさましうゐなかひたりしもたとしへなく

41オ

そ思くらへらるゝや御しつらひよりはしめいま
めかしうけたかくておやはらからとむつひ
きこえ給御さまかたちよりはしめめもあや
におほゆるにいまそ三条も大弐をあなつ
らはしく思けるましてけんかいきさしけはひ

思出るもゆゝしきことかきりなしふんこのすけの心はへを有かたき物に君も覚ししり右近も思ひいふおほそうなるはことも(を)おこたりぬへしとてこなたのけいしともさためあるへきことゝもをきてさせ給ふんこの介もなり

41ウ

ぬ年比ゐなかひしつみたりし心ちにには
かになこりなくいかてかかりにても立いてみる
へきよすかなく覚(え)えしおほとのゝうちを朝
夕にいていりならし人をしたかへことおこ
なふ身となれるはいみしきめいほくと思け
り・おとゝの君の御心をきてのこまかに有か
たうおはしますこといとかたしけなし年
のくれに御しつらひのこと人々のさうそく
なとやんことなき御つらに覚しをきてた
るかゝりともゐなかひたることなとやと山かつ
のかたにあなつりをしはかりきこえ給(てイ)てて

42オ

うしたるも奉り給ついてにをり物とものわ
れも〳〵とてをつくしてをりつゝもてまい
れるほそなかこうちきの色々さま〳〵なる
を御らんするにいとおほかりける物ともかなかた
かたにうら(や)みなくこそものすへかりけれとうへ
にきこえ給へはみくしけ殿につかうまつれる
もこなたにせさせ給へるもみなとうてさせ
給へりかゝるすちはたいとすくれてよにな
き色あひにほひを〇(えめつけ)給へは有かたしと思き

42ウ

こえ給こゝかしこのうちとのよりまいらせたる
うちものとも御らんしくらへてこきあかきな
とさま〳〵をえらせ給つゝ御そひつころもは
こともにいれさせ給ふておとなひたる上らふ
ともさふらひてこれはかれはととりくしつゝ
いるうへもみ給ていつれもを(お)とりまさるけち
めもみえぬ物ともなめるをき給はむ人の御
かたちに思よそへつゝ奉れ給へかしきたる物

のさまにぬはひか〳〵しくもありかしとの
たまへはおとゝうちわらひてつれなくて人
の御かたちをしはからむの御心なめりなさて
いつれをとか覚すときこえ給へはそれもかゝ
みにてはいかてかとさすかにはちらひてお
はすこうはいのいともんうきたるえひそ
めの御こうちきいまやう色のいとすくれたる
とはかの御れうさくらのほそなかにつやゝか
なるかいねりとりそへては姫君の御れう
なりあさはなたのかいふのをり物をりさま
なまめきたれとにほひやかならぬにいとこ
きかいねりくしてなつの御かたに・くもりなく

43オ

あかきに山ふきのはなのほそなかはかのにし
のたいに奉れ給うへはみぬやうにて覚しあ
はすうちのおとゝのはなやかにあなきよ
けとはみえなからなまめかしうみえたる

かたのましらぬにたるなめりとけにを
しはからるゝを色には出し給はねととの見や
り給へるにたゝならす・いて此かたちのよそ
へは人はらたちぬへきことなりよきとても物
の色はかきりあり人のかたちはをくれた
るもまたなをそこひある物をとてかのすゑ
つむはなの御れうにやなきのをり物のよし
あるからくさをみたれをれるもいとなまめき
たれは人しれすほゝゑみ給・むめのおり
えたてふとりとひちかひからめいたるしろ
きこうちきにこきかつやゝかなるかさねて
あかしの御かたに思やりけたかきをうへはめ
さましと見給うつせみのあま君にあをにひ
のをりものいと心はせあるをみつけ給ふて
御れうにあるくちなしの御そゆるし色なる
そへ給ひておなし日き給へき御せうそくき

44オ

44ウ

こえめくらし給ひ(けイ)にについたるみむの御心な
りけり御かへりたゝならす御つかひのろく
心々なるにすゑつむ東の院におはすれは
いますこしさしはなれえむなるへきをうるはし
く物し給人にてあるへきことはたかへ給はす
やまふきのうちきの袖くちいたくすゝけたる
をうつほにてうちかけ給へり御ふみにはいと
かうはしきみちのくにかみのすこしとしへ
あつきかきはみたるに・いてや給へるは中〳〵
にこそ

45オ

きてみれはうらみられけりから衣かへしやり
てん袖をぬらして御てのすちことにあふより
にたゐ(り)いたくほゝゑみ給てとみにもう
ちをき給はねはうへなに事ならんとみをこ
せ給へり御つかひにかつけたる物をいとわひ
しとかたはらいたしと覚して御けしきあしけれ
はすへりまかてぬいみしくをの〳〵はさゝ
めきわらひけり・かやうにわりなうふるめかしう
かたはらいたき所のつき給へるさかしらにもて
わつらひぬへく覚すはつかしきまみなり・

45ウ

こたいのうたよみはから衣たもとぬるゝかこと
こそはなれねなまろもそのつらそかしさらに
一すちにまつはれていまめきたることの葉
にゆるき給はぬこそねたきことは〇あれ(ヌイ)・人の
なかなる事をおりふしおまへなとのわさと
あるうたよみの中にてはまとひ(ゐ)はなれぬみ
もしそかしむかしのけさうのおかしきいとみには
あた人といふいつもしをやすめ所にうちをき
てことのはのつゝきたよりある心ちすへかめ
りなとわらひ給・よろつのさうしうたまくらよく

46オ

あないしりみつくしてそのうちのことはをとり
出るによ(よイ)みつきたるすちこそわ(つ)ようはかは
らさるへけれひたちのみこのかきをき給へ

りけるかうやかみのさうしをこそみよとてをこ
せたりしかわかのすいなういと所せうやまひ
さるへき所おほかりしかはもとよりをくれたる
かたのいとゝなか〳〵うこきすへくもみえさりし
かはむつかしくてかへしてきよくあないしり給へ
る人のくちつきにてはめなれてこそあれと
ておかしくおほいたるさまそいとおしきやうへいと

46ウ

まめやかにてなとてかへし給けんかきとゝめて
姫君にもみせ奉り給へかりける物をこゝにも物
のなかなりしもむしみなそこなひてけれはみ
ぬ人はた心ことにこそはとをかりけれとの給姫君
の御かくもんにいとようなからんすへて女はたてゝこ
のめることまうけてしみぬるはさまよからぬこと
なりなにこともいとつきなからむはくちおしから
むたゝ心のすちをたゝよはしからすもてしつ
めをきてなたらかならんのみなむめやすかるへ
かりけるなとの給てかへりことはおほしも

かけねはかへしやりてむとあめるにこれより
をしかへし給はさらんはひか〳〵しからむとそゝ
のかしきこえ給なさけすてぬ御心にてかき給
いと心やすけなり
　かへさむといふにつけてもかたしき〇よるの
ころもをおもひこそやれことはりやとそあめる

47ウ

47オ

（はつね）

としたちかへるあしたの空のけしき名
残なくくもらぬうらゝかけさには数ならぬ
かきねのうちたに雪まの草わかやかに
色つきはしめいつしかとけしきたつ霞
に木のめもうちけふりをのつから人の
心ものひらかにそみゆるかしましくいとゝ玉
をしけるおまへは庭よりはしめ見所おほ
くみかきまし給へる御方〳〵のありさま
まねひたてむもことの葉たるましくなん・
春のおととのおまへとりわきて梅のかも

1オ

みすのうちのにほひに吹まかひていける
仏のみ国とおほゆさすかにうちとけて
やすらかにすみなし給へり・さふらふ人〳〵も
わかやかにすくれたるをひめきみの御方に

とえらせ給てすこしおとなひたるかき
りなか〳〵よし〳〵しくさうそくありさまより
はしめてめやすくもてつけて爰かしこに
むれゐつゝはかためのいはひしてもちい
かゝみをさへとりませてちとせのかけにしる
きとしのうちのいはひことゝもしてそほれ

1ウ

あへるにおとゝのきみさしのそき給へれは
ふところてひきなをしつゝいとはしたなきわ
さかなとわひあへり・いとしたゝかなるみつ
からのいはひことゝもかなみなをの〳〵おもふ
ことのみち〳〵あらむかしすこしきかせよやわ
れことふきせむとうちわらひ給へる御ありさま
をとしのはしめのさかえに見奉る・われはと
おもひあかれる中将のきみそかねてそみゆ
るなとこそかゝみの影にもかたらひ侍りつれ
わたくしのいのりはなにはかりのことをかなと聞ゆ・

2オ

あしたの程は人〳〵まいりこみて物さはかしかり
けるを夕つかた御方〳〵のさむさし給はむとて
心ことにひきつくろひけさうし給御影こそ
けに見るかひあめれ・けさこの人〳〵の
たはふれかはしつるいとうらやましう見えつるを
うへにはわれみせ奉らむとて乱れたることゝも
すこしうちませつゝいはひ聞え給
　うす氷とけぬる池のかゝみにはよにたくひ
なき影そならへるけにめてたき御あはひ
ともなり

2ウ

　くもりなき池のかゝみによろつ代をすむ
へき影そしるく見えける・なにことにつけて
もする遠き御ちきりをあらまほしく聞え
かはし給・けふは子の日也けりけにちとせの春を
かけていはゝむにことはりなる日也・姫君の御方
に渡り給へれはわらはしもつかへなとおまへ
の山の小松ひきあそふわかき人〳〵の心ちと
もをき所なくみゆ・北のおとゝよりわさとかましく
しあつめたるひけこともわりこなと奉れ給へり
えならぬ五えうの枝にうつ〇(れイ)るうくひすも

3オ

おもふ心あらむかし
　とし月をまつにひかれてふる人にけふ鶯
の初音きかせよをとせぬ里のと聞え給
へるをけにあはれとおほししることいみも
えし給はぬけしきなり・〇(こゝ)御かへりはみつから
聞え給へ初ねおしみ給へきかたにもあら
すかしとて御すゝりとりまかなひかゝせ奉ら
せ給いとうつくしけにて明暮見奉る
人たにあかすおもひ聞ゆる御ありさまを
いまゝておほつかなきとし月のへたゝり

3ウ

けるもつみえかましく心くるしとおほす
　ひき別としはふれともうくひすのすたちし
松のねを忘れめやおさなき御心ちにまかせ

てくた〳〵しくそあ〇る・夏の御すまゐを見
給へは時ならぬけにやいとしつかに見えて
わさとこのましきこともなくあてやかに住なし
給へるけはひ見え渡るとし月にそへて
御心のへたてもなくあはれなる御なからひ
なりいまはあなかちにちかやかなる御ありさま
ももてなし聞え給はさりけりいとむつましく

4オ

ありかたからむいもせのちきりはかり聞え
かはし給御きちやうへたてたれとすこしを
しやり給へはまたさておはすはなたはけに
にほひおほからぬあはひにて御くしなとも
いたくさかりすきにけりやさしき方にあらね
とえひかつらしてそつくろひ給へきわれ
ならさらむ人は見さめしぬへき御ありさま
をかくてみるこそうれしくほいあれこゝ
ろかろき人のつらにてわれにそむき給
なましかはなと御たいめむのおり〳〵には

4ウ

まつわか御心の長さも人の御心のをもきを
もうれしくおもふやうなりとおほしけりこま
やかにふるとしの御物語なとなつかしく聞え
給てにしのたいへ渡り給・またいたくも住
なれ給はぬ程よりはけはひおかしくしな
しておかしけなるわらはへのすかたなまめ
かしく人影あまたして御しつらひあるへき
かきりなれともこまやかなる御てうとはいとし
もとゝのへ給はぬをさる方に物きよけに
住なし給へりさうしみもあなおかしけと

5オ

ふと見えてやまふきにもてはやし給へる御
かたちなといとはなやかに爰そくもれると見
ゆる所なくくまなくにほひきら〳〵しくみ
まほしきさまそし給へる物おもひにしつ
み給へるほとのしわさにやかみのすそ
すこしほそりてさはらかにかゝれるしも

いと物きよけに爰かしこいとけさやかなる
さまし給へるをかくて見さらましかはと
おもほすにつけてはえしも見すくし給
ましくやかくいとへたてなく見奉り〇給(なれイ)へと

5ウ

猶おもふにへたゝりおほくあやしきかうつゝ
の心ちもし給はねはまほならすもてなし給
へるもいとおかし・としころになりぬる心ちし
て見奉るも心やすくほいかなひぬるを
つゝみなくもてなし給ひてあなたなとにも
渡り給へかしいはけなきうゐことならふ人
もあめるをもろ共にきゝならし給へうし
ろめたくあはつけき心もたる人なき所なりと
聞え給へはの給はせむまゝにこそはと聞え給
さもあることそかし・暮かたになるほとに

6オ

あかしの御方に渡り給近きわたとのゝ戸
をしあくるよりみすのうちの追風なまめ
かしくふきにほはかして物よりことにけた
かくおほさるさうしみは見えすいつらと
見まはし給にすゝりのあたりにきはゝしく
さうしともとりちらしたるをとりつゝ見給
からの〇きのこと(どうきそうイ)〳〵しきはしさしたるしとね
におかしけなるきむうちをきわさとめきよ
しある火おけにしゝうをくゆらかして物
ことにしめたるにえひかうのかのまかへる

6ウ

いとえむなり手習ともの乱れうちとけた
るもすちかはりゆへあるかきさまなりこ
と〳〵しうさうかちなとにもさえ(れイ)からすめ(かイ)や
すくかきすましたり小松の御かへりをめ
つらしと見けるまゝにあはれなるふるこ
とゝもかきませて
　めつらしや花のねくらに木つたひて谷の
ふるすをとへるうくひす声まち出たるなとも
ありさける岳辺に家しあれはなとひき

かへしなくさめたるすちなとかきませつゝある

をとりて見給つゝほゝゑみ給へるはつかしけ
なりふてさしぬらしてかきすさひ給程にゐさ
り出てさすかにみつからのもてなしはかしこ
まりをきてめやすきよういなるを猶人よりは
ことなりとおほすしろきにけさやかなる
かみのかゝりのすこしさはらかなる程にう
すらきにけるもいとゝなまめかしさそひて
なつかしけれはあたらしきとしの御さはかれ
もやとつつましけれとこなたにとまり給ひぬ
猶おほえことなりかしと方〳〵に心をきて

7オ

おほす南のおとゝにはましてめさましかる
人〳〵ありまた明ほのゝほとに渡り給ひぬ
かくしもあるましき夜ふかさそかしとおもふ
に名残もたゝならすあはれにおもふまちとり
給へるはたなまけやけしとおほすへかめる

7ウ

心のうちはかられ給て・あやしきうたゝねをし
てわか〳〵しかりけるいきたなさをさしも
おとろかし給はてと御けしきとり給もおか
しうみゆことなる御いらへもなけれはわつらは
しくて空ねをしつゝ日たかくおほとの

8オ

こもりおきたり・けふはりむしきやくのことに
まきらはしてそおもかくし給上達部みこ達
なと例の残りなくまいり給へり御あそひ
ありてひきいて物ろくなとになしそこらつ
とひ給へるかわれもおとらしともてなし給へる
中にもすこしなすらひなるたに見え給はぬ
物かなとりはなちてはいうそくおほく物し
給ころなれとおまへにてはけおされ給わ
ろしかしなにのかすならぬしもへともなとた
に此院にまいるには心つかひことなりまして

8ウ

わかやかなる上達部なとはおもふ心なと物し給

てすゝろに心けさうし給つゝつねのとし
よりもことなり・はなのかさそふ夕風のとかにうち
吹たるにおまへの梅やう〳〵ひもときてあれは
たれときなるにものゝしらへともおもしろくこ
の殿うちいてたるひやうしいとはなやかなりおとゝ
もとき〳〵声うちそへ給へるさきくさのすゑ
つかたいとなつかしうめてたく聞ゆなにことも
さしいらへし給御ひかりにはやされて色をもね
をもますけちめことになんわかれける・かくのゝ

9オ

しる馬車のをとをも物へたてゝきゝ給御方
〳〵ははちすのなかのせかひにまたひらけさら
む心ちもかくやと心やましけなりましてひむ
かしの院にはなれ給へる御方〳〵はとし月
にそへてつれ〳〵のかすのみまされとよのうきめ
見えぬ山ちにおもひなすらへてつれなき人
の御心をはなにとかは見奉りとかめむその〇
心もとなくさひしきことはたなけれはおこなひ

のかたの人はそのまきれなくつとめかなの
よろつのさうしのかくもむ心にいれ給はん人は

9ウ

又そのねかひにしたかひ物まめやかにはか〳〵し
きをきてにもたゝ心のねかひにしたかひた
るすまゐなり・さはかしき日比すくして渡り
給へりひたちの宮の御方は人の程あれは
心くるしくおほして人めのかさりはかりは
いとよくもてなし聞え給いにしへさかりと見えし
御わかかみもとし比におとろへ行まして滝の
よとみはつかしけなる御かたはらめなとをいとお
しとおほせはまほにもむかひ給はす柳は
けにこそすさましけれとみゆるもきなし給へる

10オ

人からなるへし光もなくくろきかいねりのさひ
〳〵しくはりたるひとかさねさるをり物の
うちきをき給へるいとさむけに心くるしか
さねのうちきなとはいかにしなしたるにかあら

む御はなの色はかり霞にもまきるましく
はなやかなるに御心にもあらすうちなけかれ
給てことさらにみきちやうひきつくろひへ
たて給なか〳〵女はさしもおほしたらす今は
かくあはれになかき御心の程をおたしき
物にうちとけたのみ聞え給へる御さまあは

10ウ

れなりかゝるかたにもをしなへての人ならすいと
おしくかなしき人の御さまとおほせはあはれに
われたにこそはと御心とゝめ給へるもあり
かたきそかし御声なともいとさむけにうちわなゝ
きつゝかたらひ聞え給見わつらひ給て御そ
とものことなとうしろ見聞ゆる人は侍りやかく心
やすき御すまゐはたゝいとうちとけたるさまに
ふくみなへたるこそよけれうはへはかりつくろ
ひたる御よそひはあひなくなんと聞え給へは
こち〳〵しくさすかにわらひ給てたいこのあさり

11オ

のきみの御あつかひし侍りとてきぬともゝえぬ
ひ侍らてなむかはきぬをさへとられにしのち
さむく侍ると聞え給はいとはなあかき御せう
となりけり心うつくしといひなからあまりう
ちとけすきたりとおほせと爰にてはいと
まめにきすくの人にておはす・かはきぬはい
とよし山ふしのみのしろ衣にゆつり給て
あへなんさてこのいたはりなき白にの衣は
なゝへにもなとかかね給はさらむさるへきお
り〳〵はうち忘れたらむこともおとろかし給へかし

11ウ

もとよりおれ〳〵しくたゆき心のおこたりに
まして方〳〵のまきらはしきゝほひにもをの
つからなんとの給てむかひの院の御くらあけ
させてきぬあやなと奉らせ給・あれたる所も
なけれと住給はぬ所のけはひはしつか
にてお御まへの木たちはかりそいとおもしろく
紅梅のさき出たるにほひなと見はやす人も

なきを見渡し給て
　ふるさとの春の木するゑに尋きてよのつ
ねならぬはなを見るかなとひとりこち給へと
きゝしり給はさりけむかし・うつせみのあ
ま衣にもさしのそき給へりうけはりたる
さまにはあらすかこやかにつほね住にしなし
て仏はかりに所えさせ奉りておこなひ
つとめけるさまあはれに見えて経仏の
かさりはかなくしたるあかの具なともおかし
けになまめかしく猶心はせありと見ゆ
る人のけはひなりあをにひのきちやう
心はえおかしきにいたくゐかくれて袖くち
はかりそ色ことなるしもなつかしけれは涙くみ

12オ

給ひて・松かうら島をはるかにおもひてそやみぬへ
かりけるむかしより心うかりける御ちきり
かなさすかにかはかりのむつひはたゆまし
かりけるよなとの給あまきみも物あはれ
なるけはひにてかゝるかたに〇のみ聞えさする
しもなんあさくはあらすおもひ給へしられ侍
けると聞ゆつねにおり〳〵かさねて心まとはし
給しよのむくひなとを仏にかしこまりきこ
ゆるこそくるしけれおほししるやかくいと
すなほにしもあらぬ物をとおもひあはせ給

12ウ

こともあらしやはとなむおもふとの給かのあさまし
かりしよのふることをきゝをき給へるなめりと
はつかしくかゝるありさまを御覧しはてらるゝ
よりほかのむくひはいつくにか侍らんとてま
ことにうちなきぬいにしへよりも物ふかくはつ
かしけさまさりてかくもてはなれたること、
おほすしも見はなちかたくおほさるれはは
かなきことをの給ひかくへくもあらすおほか
たのむかしいまの物語をし給てかはかりの
いふかひたにあれかしとあなたを見やり給・

13オ

かやうにて〇(も)御影にかくれたる人〳〵おほかり
みなさしのそき渡し給ておほつかなき日数
つもるおりくあれと心のうちはをこたら
すなんたゝかきりあるみちの別のみこそうし
ろめたけれいのちそしらぬなとなつかしくの
給いつれをもほと〳〵につけてあはれとおほし
たり・われはとおほしあかりぬへき御身の程
なれとさしもこと〳〵しくもてなし給はす所に
つけ人のほとにつけつゝあまねくなつかしく
おはしませはたゝかはかりの御心にかゝりてなん

13ウ

おほくの人〳〵とし〇(月イ)をへける・ことしはおとこ
たうかありうちより朱雀院にまいりて次
にこの院にまいるみちのほと遠〇(く)て夜明か
たになりにけり月のくもりなくすみまさり
てうす雪すこしふれる庭のえならぬに
殿上人なとも物の上手おほかるころほひ

14オ

にてふえのねもいとおもしろくふきたてゝ
このおまへはことに心つかひしたり御方〳〵も
見に渡り給へくかねて御せうそことも
ありけれは左右のたいわた殿なとに御つ

14ウ

ほねしつゝおはす西のたいのひめきみは
しむてんの南の御かたに渡り給てこなた
のひめきみ御たいめむありけりうへもひと
所におはしませはみきちやうはかりへたてゝ聞
え給・朱雀院のきさいの宮の御かたなとめ
くりけるほとに夜もやう〳〵明行は水む
まやにてことそかせ給へきを例あることよりほ
かにさまことにことくはへていみしくもてはや
させ給影すさましきあかつき月夜に
雪はやう〳〵ふりつむ松風こたかく吹おろし

15オ

物冷しくもありぬへき程にあを色のなへ
はめるにしらかさねの色あひなにのかさり

かはみゆるかさしのわたはにほひもなき物
なれと所からにやおもしろく心ゆき命のふる
程なり殿の中将のきみうちの大とのゝ
きみたちそこらにすくれてめやすくはな
やかなりほの〳〵と明行に雪やゝちりて
そゝろさむきに竹河うたひてかよれるす
かたなつかしき声〳〵のゑにもかきとゝめ
かたからむこそ口おしけれ御方〳〵いつれ
も〳〵もおとらぬ袖くちともこほれ出た
るこちたさものゝ色あひなとも明ほのゝ
空に春のにしきたち出にける霞のうち
かと見渡さるあやしく心行見物にそあ
りけるさるはかうこしのよはなれたるさま
ことふきのみたりかはしきおこめきたるこ
ともこと〳〵しくとりなしたるなか〳〵なに
はかりのおもしろかるへきひやうしも聞えぬ
物を例のわたかつき渡りてまかてぬ・夜

15ウ

明はてぬれは御方〳〵かへり渡り給ひぬ

16オ

おとゝのきみすこしおほとのこもりて日た
かくおき給へり中将の声は弁少将に
おさ〳〵おとらさめるはあやしくいふそくとも
おひ出るころほひにこそあれいにしへの
人はまことにかしこきかたやすくれたることも
おほかりけむなさけたちたるすちはこの
ころの人にえしもまさらさりけむかし中
将なとをはすく〳〵しきおほやけ人にしな
してむとなんおもひをきてしみつからの
あされはみたるかたくなしさをもてはなれ
よとおもひしかと猶したにはほのすきたるす
ちの心をこそとゝむへかめれもてしつめ
すくよかなるうはへはかりはうるさかめり
なといとうつくしとおほしたり・はむすんらく
御くちすさひにの給て人〳〵のこなたにつ

16ウ

とひ給へるついてにいかてかものゝ音こゝろ
みてしかなわたくしのこえむすへし(あるイ)との給
て御琴とものうるはしきふくろともして
ひめをかせ給へるみなひき出てをしの
こひてゆるへるをとゝのへさせ給なとす　17オ

御方〳〵心つかひいたくしつゝ心けさうを
つくし給らむかし　17ウ

(こてふ)

やよひのはつかあまりの比ほひ春の
御前のありさまつねよりことにつく
してにほふ花の色鳥のこゑほかのさ
とにはまたふりぬにやとめつらしう
みえきこゆ山の木たちなかしまのわ
たり色まさるこけのけしきなとわか
き人々のはつかに心もとなくおもふへか(ゑイ)
めるに(ため)からめ(うイ)いたるふねつくらせ給け
るいそきさうそかせ給ておろしはしめ
させたまふ日はうたつかさの人めして舟の

1オ

かくせらるみこたちかむたちめなとあ
またまいり給へり・中宮このころさとに
おはしますかの春まつそのはとはけま
しきこえ給へりし御かへりもこの比

やとおほしおとゝの君もいかてこの花の
折御覧せさせむとおほしのたまへと
つゐてなくてかるらかにはひわたり花
をもてあそひたまふへきならねはわか
き女房たちの物めてしぬへきをのせ
給てみなみのいけは(のイ)こなたにとをしか

よはしなさせ給へるをちいさき山をへた
てのせきに見せたれと其山のさき
よりこきまひてひむかしのつり殿に(に)
こなたのわかき人々あつめさせたまふ龍
頭鷁首をからのよそひにこと〳〵しうし
つらひてかちとりさほさすわらはへみな
みつか(ママ)らゆひてもろこしたゝせてさる
おほきなる池の中にさしいてたれは
まこと(にイ)にしらぬ国にきた覧心ちしてあ
はれにおもしろくみならはぬ女房なとは

1ウ

2オ

おもふなかしまのいりえの岩かけにさし
よせてみれははかなき石のたゝすまひ
もたゝ絵にかいたらむやうなりこなたか
なた霞あひたるこすゑともにしきをひ
きわたせるにおまへのかたははる〳〵と
みやられて色をましたる柳えたを
たれたる花もえもいはぬにほひをちら
したりほかにはさかり過たる桜もいま
さかりにほゝゑみらうをめくるふちの
色もこまやかにひらけゆきにけりまし

て池の水にかけをうつしたるやまふき
きしよりこほれていみしきさかりし
水鳥ともものつかひ〇はなれすあそひつゝほ
そきえたともをくひてとひちかふをし
の波のあやにもんをましへたるなとも
のゝゑやうにもかきとらふほしき〇まことに
をのゝえもくたいつへう思ひつゝ日をくらす

2ウ

風吹は波の花さへいろみえて
こやなにたてるやまふきのさき
春の池やゐての川瀬にかよふらん

岸の山ふきそこもにほへり
かめのうへの山もたつねし舟のうちに
おひせぬなをはこゝにのこさん
春の日のうらゝにさして行舟は
さほのしつくも花そちりける

なとやうのはかなことゝもを心〳〵にいひ
かはしつゝゆくかたもかへらむ里もわすれ
ぬへうわかき人々の心をうつすにことはりな
る水のおもになむ・くれかゝるほとにわう〇
といふかくいとおもしろくきこゆるに

3オ

心にもあらすつり殿にさしよせられ
ておりぬこゝのしつらひいとことそきたる
さまになまめかしきに御かた〳〵のわか

3ウ

き人とものわれおとらしとつくしたる
さうそくかたち花をこきませたるにし
きにおとらすみえわたる世にめなれす
めつらかなるかくともつかうまつるまひ
人なと心ことにえらはせ給て人の御心
ゆくへきてのかきりをつくさせたまふ
夜にいりぬれはいとあかぬ心ちして御前

のにはにかゝり火ともしてみはしのもとに
こけのうへにかく人めしてかむたちめみこ
たちみなをの〳〵ひき物ふき物とり〳〵
にしたまふものゝ師ともことにすくれ
たるかきりそうてうふきてうへにまち
とる御ことゝものしらへいとはなやかにか
きたてゝあなたうとあそひたまふ程
いけるかひありとなにのあやめもしらぬ
しつのおもみかとのわたりひまなきむ
まくるまのたちとにましりてゑみさ

4オ

かへきゝけり空の色も物のねも春の
しらへひゝきはいとことにまさりけるけち
めを人〳〵おほしわく覧かし夜も
すからあそひあかし給ふかへりこゑに喜
春楽たちそひて兵部卿〇宮あをやき折
かへしおもしろくうたひ給ふあるしの
おとゝもことくはへたまふ・夜もあけぬ朝
ほらけのとりのさえつりを中宮はもの
へたてゝねたうきこしめしけり・いつも
春のひかりをこめ給へるおほ殿なれと

心をつくるよすかの又なきをあかぬこと
におほす人々もありけるにしの
たいのひめ君こともなき御ありさまお
とゝのきみもわさとおほしあかめきこ
え給御けしきなとみな世にきこえいて
ておほししもしるく心なひかしたまふ

4ウ

5オ

人おほかるへま・わか身さはかりとおもひ
あかり給ふきはの人こそたよりにつけ
つゝけしきはみことにいてきこえ給ふ
もありけれえしもうちいてぬ中の思ひ

5ウ

にもえぬへきわかきみたちなともある
へしそのうちにことの心をしらてうちの
おほいとのゝ中将なとはすきぬへかめり・兵部
卿〇宮はたとしころおはしける北方もうせ
給てこのみとせはかりひとりすみにてわ
ひ給へはうけはりていまはけしきはみ給け
さもいみといたうそゝみたれしてふちの花
をかさしてなよひさうとき給へる御さま
いとおかしおとゝもおほしゝさまかなふとし
たにはおほせとせめてしらすかほつくり

6オ

たまふ御かはらけのついてにいみしうもて
なやみたまふておもふ心侍らすはまかり
にけなましいとたへかたしやとすまひた
たまふ
　むらさきのゆへにこゝろをしめたれは
ふちに身なけむ身やはおしけきとて
おとゝの君におなしかさしをまいり給
いといたうほほゑみ給ひて
　ふちに身をなけつへしやと此春は
花のあたりをたちさらてみよとせち

6ウ

にとゝめたまへはえたちあかれ給はて
けさの御あそひましていとおもしろし・
けふは中宮のみと経のはしめなりけり
やかてまかて給はてやすみ所とりつゝ
日の御よそひにかへたまふ人々もおほかり
さはりあるはまかてなともしたまふむま
の時はかりにみなあなたにまいりたまふ
おとゝの君をはしめたてまつりてみな
つきわたり給ふ殿上人なとものこり

なくまいるおほくはおとゝの御いそきほひ

7オ

にもてなされ給ひてやむことなくいつく
しき御あり〇なり・春のうへの御心さしに
仏に花たてまつらせ給ふ鳥てふに
さうそきわけたるわらはへ八人かたち
なとことにとゝのへさせ給ひてともにしろ
かねのはなかめに桜をさしてふはこかね
のかめに山吹おなしき花のふさもいかめし
う世になきにほひをちらさせ給へり
みなみのおまへの山きはよりこきいてゝ
御まへにいつるほとかせふきてかめのさく

7ウ

らすこしうちゝりまかふいとうらゝかに
はれて霞のまよりたちいてたるはいとあ
はれになまめきてみゆわさとひらはり
なともうつされすおまへにわたれるらう
をかくやのさまにしてかりにあくらと
もをめしたりわらはへともみはしのもと
によりて花ともたてまつる行香の人
〳〵とりつきてあかにくはへさせたまふ
御せうそこ殿の中将の君してきこえ
給へり

8オ

花そのゝこてふをさへや下草に
秋まつむしはうとくみるらん宮かのもみち
の御かへりなりけりとほゝゑみて御らん
す昨日の女房たちもけに春の色はえ
おとさせ給ましかりけりと花におれつゝ
きこえあへり・うくひすのうらゝかなる程
にとりのかくはなやかにきゝわたされて
池の水鳥もそこはかとなくさへつり
わたるにきうになりはつるほとあかすおも
しろしてふはましてはかなきさまに
とひたちて山ふきのませのもとさきこ

8ウ

ほれたるはなのかけにまひいるに宮の
すけをはしめてさへきうへ人ともろくとり
つゝきてわらはへにたまふとりにはさ
くらのほそなかてふにはやまふきかさね給
はるかねてしもとりあへたるやうなり物
の師ともはしろき一かさねこしさしな
とつき〳〵にたまふ中将の君にはふち
のほそなかそへて女のさうそくかつかせ
たまふ・御かへりきのふはねになきぬへ

くこそは

こてふにもさそはれなまし心あり
てやへ山ふきをへたてさりせはとそ有
けるすくれたる御らうともにかやうの事
はたえぬにやありけむおもふやうにこそ

みえぬ御くちつきともなめれ・まとや
かのみものゝ女房たち宮のにはみなけし

9オ

きあるをくり物もせさせ給ふけり
さやうの事くはしけれはむつかし・あけ
くれにつけてもかやうのはかなき御

あそひしけく心をやりてすくし給へ
はさふらふ人もをのつから物おもひなき
心ちしてなむこなたかなたにもきこえかは
し給・にしのたいの御かたはかのたうかの
おもの御たいめむのちはこなたにもき
こえかはし給ふふかき御心もちゐやあさ
くもいかにもあらんけしきいとらう有
なつかしき心はへとみえて人の心へたて
つへくも物し給はぬ人さまなれはいつ
かたにもみな心よせきこえ給へり・きこえ

たまふ人いとあまた物し給ふされとおとゝ
おほろけにおほしさたむへくもあらす
わか御心にもすくよかにおやかりはつか

9ウ

10オ

ましき御心やそふらんちゝおとゝにもし
らせやしてましなとおほしよる折〳〵
ありとのゝ中将はすこしけちかくみす
のもとなとにもよりて御いらへ身つ
からなとするも女はつゝましうおほせ
とさるへきほとゝ人々もしりきこえ
たれは中将はすく〳〵しくておもひよ

10ウ

らす内のおほいとのゝ君たちはこの君に
ひかれてよろつにけしきはみわひあり
くをそのかたのあはれにはあらてした
に心くるしうなむ姫君はおほしけるお
なしうはまことのおやにさもしられたて
まつりにしかなと人しれす心にはかけ給
へれとさやうにもらしきこえ給はす・
ひとへにうとけたのみきこえたまへる
心むけなとらうたけにわかやかなりに
かとはなけれと猶はゝ君のけはひにいと

よくおほえてこれはかとめいたる所そゝひ
たる・ころもかへのいまめかしうあらたま
れるころほひ空のけしきなとさへあ
やしうそこはかとなくおかしきをのとや
かにおはしませはよろつの御あそひに
て過し給にたいの御かたに人々御文しけ
くなりゆくをおもひし事とおかしうお
ほいてともすれはわたり給つゝ御覧
しさるへきには御かへりそゝのかしき
こえ給なとするをうちとけすくるしき

11オ

事におほいたり兵部卿の宮の程なくい
られかましきわひことゝもをかきあつめ
たまへるおほむふみを御らむしつけ
てこまやかにわらひ給ふはやうより
へたつることなうあまたのみこたちの御
事に此君をなむかたみにとりわき

11ウ

て思ひしにたゝかやうのすちの事なむ
いみしうへたて思ふ給ひてやみにしを
世のすゑにかくすき給へる心はへをみる
かおかしうもあはれにもおほゆるかな猶

御かへりなときこえ給へすこしもゆへ
あらん女のかのみこよりほかに又こととのは
をかはすへき人こそまた世におほえね
いとけしきあるひとの御さまそやとわか
き人はめて給ぬへくきこえしらせ
たまへとつゝましくのみおほひたり・
右大将のいとまめやかにこと〳〵しきさ
ましたる人の恋の山にはくしのたうれ
まねひつへきけしきにうれへたるも
さるかたにおかしとみなみくらへ給なか

12オ

にからのはなたのかみのいとなつかしう
しみふかうにほへるをいとほそくちひさ
くむすひたるありこれはいかなれは
かくむすほゝれたるにかとてひきあけ
給へりていとおかしうて
　おもふとも君はしらしなわきかへり
岩もる水に色しみえねはかきさまい
まめかしうそほれたりこれはいとなるそ
とゝひきこえ給へとはゐ〳〵しうもき
こえ給はす右近をめしいてゝかやうに

12ウ

をとつれきこえむ人をは人えりし
ていらへなとはせさせよすき〳〵しう
あされかましきいまやうの人のひむな
い事しいてなとするをのこのとかに
しもあらぬ事なりわれにておもひ
したにあなゝさけなうらめしうもと
そのおりにこそむしんなるにやもしは
めさましかるへきゝはゝけやけうなと
もおもほえけれわさとふかからてはな

13オ

てふにつけたるたよりことは心ねたう
もてないたる中〳〵心たつやうにも有
又さてわすれぬるはなにのとかゝはあら
む物のたよりはかりのなをさりことに
くちとう心えたるもさらてありぬへ
かりけるのちのなむとありぬへきわさ
なりす小て女の物つゝみせす心のまゝ
に物のあはれもしりかほつくりおかし
き事をも見しらんなむそのつもりあ
ちきなかるへきを宮大将はおほな〳〵
なをさりことをうちいて給へきにも

13ウ

あらすまたあまりものゝほとしら
ぬやうならむも御ありさまにたかへり
そのきはよりしもは心さし〇をもむき
にしたかひて哀をもわきたまへら
うをもかそへ給へなときこえ給へは君は

14オ

うちそむきておはするそはめいと
おかしけ也・なてしこのほそなかにこの
ころのはなの色なか御こうちきあは
ひけちかういまめきてもてなしなと
もさはいへとゐ中ひ給へりしなこりこそ

たゝありにおほとかなるかたにのみはみえ
給にけれ人のありさまを見しり給ま
まにいとさまようなよひかにけさうな
とも心してもてつけ給へれはいとゝ
あかぬ所なくはなやかにうつくしけなり
こと人とみなさむはいとくちおしかゐへう
おほさる右近もうちゐみつゝ見たて
まつりておやときこえむにはにけ
なうわかくおはしますめりさしならひ
給小らむはしもあはひめてたしかしと

14ウ

おもひゐたり・さらに人の御せうそこなと

15オ

はきこえつたふる事侍らすさき〳〵もしろしめし御覧したるみつよつはひきかへしはしたなめきこえむもいかゝとて御文はかりはとりいれなとし侍めれと御かへりはさらにきこえさせたまふおりはかりなむそれをたにくるしいことにおほいたるときこゆさてこのわかやかにむすほゝれたるはたかそいといたうかいたるけしきかなとほゝゑみて御らんすれは

15ウ

かれはしうねくとゝめてまかりにけるにこそ内のおほいとのゝ中将のこのさふらふみしこ〇をもとよりみしり給へりけるつたへに侍ける又見いるゝ人も侍らさりしにこそときこゆれはいとらうたき事かなけらうなりともかのぬしたちをはいかゝいとさははしたなめむ公卿といへとこの人のおほえにかならすしもならふましきこそおほかれさるなかにもいとしつまりたる人なりをのつからおもひあはする世もこそあれけちえむにはあらてこそいひまはさめみところあるふみかきかなとゝみにもうちをきたまはすかうなにやかやときこゆるをもおほす所やあらんとやゝましきをかのおとゝにしられたてまつり給はん事もまたかうわか〳〵しうなにとなきほとにこゝらとしへ給へる御なかにさしいて給はん事はいかゝと思ひめくらし侍るなを世の人のあめるかたにさたまり

16オ

てこそは人〳〵しうさるへきついても物し給はめとおもふを宮はひとりものし給やうなれと人からいといたうあためひてかよひたまふ所あまたきこえめしうとゝ

16ウ

かにくけなるなのりする人ともなむか
すあまたきこゆるさやうならん事は
にくけなうてみなをひ給はん人はいと
ようなたらかにもてけちてむすこし
心にくせありては人にあかれぬへき
ことなんをのつからいてきぬへきを

17オ

その御心つかひなむあへき大将はとしへ
たる人のいたうねひすきたるをいとひ
かて〇に〇もとむなれとそれも人々わつらは
しかはる〻さもあへ小事なれはさま〳〵に
なむ人しれす思ひさためかね侍るかう
さまの事はおやなとにもさはやかにわか
おもふさまとてかたりいてかたきことなれ
とさはかりの御よはひにもあらすいま
はなとかなにことをも御心にわい給はさら
むまろをむかしさまになすらへてはゝ

17ウ

君とおもひない給へ御心にあかさらん事
は心くるしくなといとまめやかにてきこ
え給へは・くるしうて御いらへきこえん
ともおほえ給はすいとわか〳〵しきも
うたておほえて何事もおもひしり侍ら
さりけるほとよりおやなとはみぬ物に
ならひ侍てともかくもおもふ給へられす
なむときこえ給さまのいとおい〻かなれ
はけにとおほいてさらは世のたとひの
のちのをそれとおほいておろかならぬ

心さしのほとも見あらはしはてまゆ
事なとうちかたらひ給ふおほすさまの〇
はまはゆけれはえうちいて給はすけし
きあることはは時々ませ給へとみしらぬ
さまなれはすゝろにうちなけかれてわたり
給ふおまへちかきくれ竹のいとわかや
かにおひたちてうちなひくさまのなつ

18オ

かしきにたちとまり給ふて
　ませのうちにねふかくうへし竹の
このをのか世々にやおひわかるへきおもへ

はうらめしかへい事そかしとみすを引
あけてきこえ給へはゐさり出て
　今さらにいかならむ世かわか竹の
おひはしめけむねをはたつねん中〳〵
にこそ侍らめときこえたまふをいとあ
はれとおほしけり・さるは心のうちにはさも
おもはすかしいかならんおりきこえいてん
とすらんと心もとなくあはれなれとこ
のおとゝの御はへのいとありかたきをおや
ときこゆともとよりみなれ給はぬは

えかうしもこまやかならすやとむかし物
語を見給にもやう〳〵人のありさま
世中のあるやうを見しり給へはいとつ

18ウ

19オ

つましう心としられたてまつらん事は
かたかるへうおほす・殿はいとらうたし
おもひきこえ給てうへにもかたり申たまふ
あやしうなつかしき人のありさまにも
あるかなかのいにしへのはあまりはるけ
所なくそありしこの君は物のあり
さまもみしりぬへくけちかき心さまそ

ひてうしろめたからすこそみゆれなと
ほめ給たゝにしもおほすましき御心
さまを見しり給へれはおほしよりても
のゝ心えつへくは物し給めるをうらな
くしもうちとけたのみきこえ給らん
こそ心くるしけれとのたまへはなとたのも
しけなくやはあるへきときこえ給へは
いてやわれにても又しのひかたう物おも
はしきおり〳〵ありし御心さまの思ひ
いてらるゝふし〳〵なくやはとほゝゑみて

19ウ

きこえ給へはあな心とゝおもひてうたても
おほしよるかないと見しらすしもあら
しとてわつらはしけれはのたまひさ
して心のうちに人のかうをしはかり
給ふにもいかゝはあへからんとおほしみた
れかつはわか〳〵しうけしからぬわか心の
ほともおもひしられ給ふけり心にかゝ
れるまゝにしは〳〵わたり給つゝ見た
てまつり給雨のうちふりたるなこり
のいと物しめやかなる夕つかたおまへの

20オ

わかゝえてかしは木なとのあをやかに
しけりあひたるか何となく心ちよけ
なる空を見いたし給ひてわしてまた
きよしとすし給てまつこの姫君の
御さまのにほひやかけさをおほし出ら
れてれいのしのひやかにわたり給へりて

20ウ

ならひなとしてうちとけ給へりけるをお
きあかりたまてはちらひ給へるかほの
色あひいとおかしなこやかなるけはひの
ふとむかゝおほしいてらるゝにもしのひ

21オ

かたくてみそめたてまつりしはいとかう
もおほえ給はすと思ひしをあやしう
たゝそれかとおもひまかへらるゝ折〳〵こそ
あれ哀なるわさなりけり中将のさ
らにむかしさまのにほひともみえぬなら
ひにさしもにぬ物とおもふをかかる人も
物したまふけるよとて涙くみ給へり
はこのふたなる御くた物の中にたち
はなのあるをまさくりて
たち花のかほりし袖によそふれは

21ウ

かはれる身ともおもほえぬかなよとと
の心にかけてわすれかたきになくさむ

事なくてすきつるとし比をかくて
見たてまつるは夢にやとのみ思ひなす
を猶えこそしのふましけれおほしうと
むなよとて御手をとらへ給へれは女か
やうにもならひたまはさりつるをいとう
たておほゆれとおほとかなるさまにて
　袖のかをよそふるからにたち花の
みさへはかなくなりもこそすれむつか
しと思ひてうつふし給へるさまいみし
うなつかしう手つきのつふ〳〵とこ
ゑ給へる身なりはたつきのこまやかに
うつくしけなるにも中〳〵なる物おもひ
そふ心ちし給ふてけふはすこしおもふ
こときこえしらせ給ける女は心うくいかに
せんとおほえてわなゝかるゝけしきもし
るけれとなにかかくうとましと○おほ○た
るいとよくもてかくして人にとかめらるへ

22オ

くもあらぬ心のほとそよさりけなく
てをもてかくし給へあさくも思ひきこ
えさせぬ心さしにまたそふへけれは世に
たくひあるましき心ちなむするをこの
をとつれきこゆる人々にはおほしおと
すへくやはあるいとかうふかき心ある人は
世にありかたかるへきわさなれはうし
ろめたくこそとのたまふいとさかしら
なる御おや心なりかし・雨はやみてかせの
竹になるほとはなやかにさしいてたる
月かけおかしき夜のさまもしめやか
なるに人々はこまやかなる御物かたりに
かしこまりをきてちかくもさふらはす
つねに見たてまつり給ふ御中なれ
とかくよきおりしもありかたけれはこと
にいて給へるついての御ひたふる心に

22ウ

23オ

やなつかしいほとなる御そとものけはひ
はいとようまきらはしすへし給ひてち
かやかにふし給へはいと心うく人のおもはむ
事もめつらかにいみしうおほゆまことの
おやの御あたりならましかはおろかに

23ウ

は見はなちたまふともかくさまのうき
事はあらましやとかなしきにつゝむと
すれとこほれいてつゝいと心くるしき
御けしきなれはかうおほすこそつらけれ
もてはなれしらぬ人たに世のことはり
にてみなゆるすわさなめるをかく年へ
ぬるむつましさにかはかりみえたてま
つるやなにのうとましかるへきそこれ
よりあなかちなる心はよもみせたてまつ
らしおほろけにしのふるにあまるほと

24オ

をなくさむるそやとてあはれけになつ
かしうきこえ給事おほかりましてかや
うなるけはひはたゝむかしの心ちしてい
みしうあはれなりわか御心なからもゆく
りかにあ〇けきことゝおほししらるれはい
とよくおほしかへしつゝ人もあやし
とおもふへけれはいたう夜もふかさて
いて給ぬ思ひうとみたまはゝいと心うく
こそあるへけれよその人はかうほれ〳〵
しくはあらぬ物そよかきりなくそこゐ

24ウ

しらぬこゝろさしなれは人のとかむへきさ
まにはよもあらしたゝむかし恋しき
なくさめにはかなき事をもきこえ電
おなし心にいらへなとし給へといとこまや
かにのたまへとわれにもあらぬさまして
いと〳〵うしとおほいたれはいとさはかりに
はみたてまつらぬ御心はへをいとこよな
くもにくみたまふへかめるかなとなけ

き給ひてゆめけしきなくをとていて
給ぬ・女君も御としこそすくし給にた
る程なれ世中をしり給はぬなかにも
すこしうちよなれたる人のありさま
をたに見しり給はねはこれよりけち
かきさまにもおほしよらす思ひのほか
にもありける世かなとなけかしきにい
とけしきもあしけれは人々御心ちなや
ましけにみえ給ふともてさはきゝこゆ
とのゝ御けしきのこまやかにかたしけなく
もおはしますかなまことの御おやときこ
ゆともさらにかはかりおほしよらぬことな
くはもてなしきこえ給はしなと兵部なと
もしのひてきこゆるにつけていとゝ
おもはすに心つきなき御心〇(の)ありさま
をうとましうおもひはて給にも身(身)そ心

25オ

25ウ

うかりける又のあした御文とくありな
やましかり〇(て)ふし給へれと人々御すゝり
なとまいりて御かへりとくときこゆれは
しふ〳〵に見たまふ・しろきかみのうは
へはおひらかにすく〳〵しきにいとめてた
うかい給へりたくひなかりし御けしき
こそつらきしもわすれかたういかに人み
たてまつりけむ
うちとけてねもみぬ物を若草の
ことありかほにむすほほるらんおさな
くこそ物し給けれとさすかにおやかり
たる御ことはもいとにくしとみたまひ
て御返事きこえさらむも人めあや
しけれはふくよかなるみちのくにかみ
にたゝうけたまはりぬみたり心ちのあや
しう侍れはきこえさせぬとのみある

26オ

26ウ

にかやうのけしきはさすかにすくよ
かなりとほゝし(ふ)みてうらみところある
心ちし給もうたてある御心かな色に
いて給ひてのちはおほたの松のとおも
はせたる事なくむつかしくきこえ給事
おほかれはいとゝ所せき心ちしてをき所
なき物おもひつきていとなやましうさ
へしたまふ・かくて事の心しれる人はす
くなうてうときもしたしきもむけの
おやさまに思ひきこえたるをかうやう

27
オ

のけしきのもりいてはいみしう人
わらはれにうき為(名)にもあるへきかな
ちゝおとゝなとのたつねしり給にても
まめ〳〵しき御心はへにもあらさらん
物からましていとあはつけうまちき
きおほさむことゝよろつにやすすけ
なうおほしみたる・宮大将なとはとのゝ

御けしきもてはなれぬさまにつた
へきゝ給ひていとねんころにきこえ給
ふこの岩もる中将もおとゝの御ゆる

27
ウ

しをほのきゝてまことのすち(を)〇はしら
すたゝひとへにうれしくておりた
ちうらみきこえまとひありくめり

28
オ

注

(1)「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録　源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七巻二号（中京大学文学部　平成二五年三月）

(2)「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆　桐壺」『文学部紀要』第四八巻一号（中京大学文学部　平成二五年一〇月）

(3)「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆　帚木」『文学部紀要』第四八巻二号（中京大学文学部　平成二六年三月）

(4)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　蓬生　手習　玄陳筆　関屋」『文学部紀要』第五一巻二号（中京大学文学部　平成二九年三月）

(5)「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆　空蝉　岡本主水筆　夕顔」『文学部紀要』第四九巻一号（中京大学文学部　平成二六年一〇月）

(6) 注5に同じ。

(7)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　若紫　石井了倶筆　末摘花　左馬助筆　花宴」『文学部紀要』第四九巻二号（中京大学文学部　平成二七年三月）

(8)「長谷川端蔵『源氏物語』東寺観智院筆　葵　岡本主水筆　賢木　北左平次行生筆　花散里」『文学部紀要』第五〇巻一号（中京大学文学部　平成二七年一〇月）

(9)「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆　須磨　岡本主水筆　明石　澪標」『文学部紀要』第五〇巻二号（中京大学文学部　平成二八年三月）

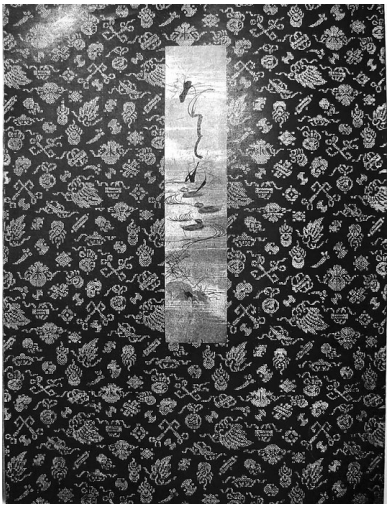
(10) 注9に同じ。

(11) 注4に同じ。

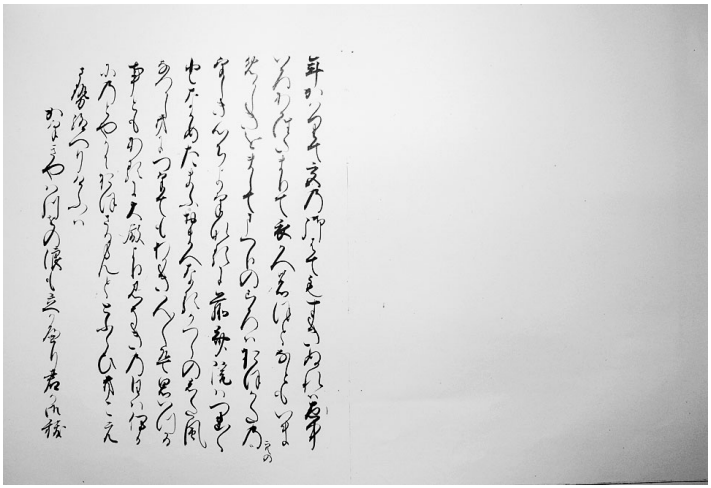
(12)「長谷川端蔵『源氏物語』宗琢筆　絵合　玄仍息女筆　松風　岡本主水筆　薄雲　伴与九郎紀金筆　朝顔」『文学部紀要』第五二巻一号（中京大学文学部　平成二九年一一月）

(13)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　橋姫」『文学部紀要』第五一巻一号（中京大学文学部　平成二八年一二月）
(14) 注4に同じ。
(15) 注7に同じ。
(16)「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　紅葉賀」『文学部紀要』第四六巻二号（中京大学文学部　平成二四年三月）
(17)「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　宿木」『文学部紀要』第四七巻一号（中京大学文学部　平成二四年一〇月）
(18) 注7に同じ。
(19) 注8に同じ。
(20) 注8に同じ。
(21) 注9に同じ。
(22) 注12に同じ。
(23) 注12に同じ。
(24) 注12に同じ。
(25) 高柳光寿氏他編『新訂寛政重修諸家譜』第一八（続群書類従完成会　昭和四〇年一二月）
(26) 市古貞次他編『国書人名辞典』第二巻（岩波書店　平成七年五月）、加藤楸邨氏他監修『俳文学大辞典』（角川書店　平成七年一〇月）、広木一人氏編『連歌辞典』（東京堂出版　平成二二年三月）を参考。
(27) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』（明治書院　平成九年四月）
(28) 加藤楸邨氏他監修『俳文学大辞典』（角川書店　平成七年一〇月）「昌琢」の項。
(29) 市古貞次氏他監修『日本古典文学大事典』第三巻（岩波書店　昭和五九年四月）「昌琢」の項。
(30) 注28に同じ。
(31) 中村幸彦氏編著『策伝和尚送答控』未刊文芸資料第三期（古典文庫　昭和二九年一月）

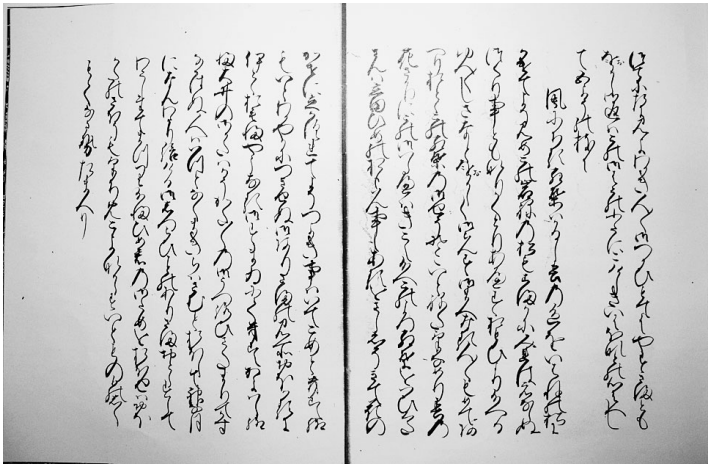
(32) 鈴木棠三氏『安楽庵策伝ノート』（東京堂出版　昭和四八年九月）、続群書類従完成会編『群書解題』第八（続群書類従完成会　昭和三六年四月）も参考。
(33) 森末義彰氏「近世初頭の京都における椿愛好」『白百合女子大学研究紀要』第六号（昭和四五年一二月）
(34) 注32に同じ。
(35) 注1に同じ。
(36) 代表 田中弘清氏『石清水八幡宮史』首巻（続群書類従完成会　昭和一四年八月・第二刷 平成九年七月）
(37) 注36に同じ。『続群書類従』第七輯上（続群書類従完成会　昭和三年三月）「石清水祠官系図」も参考。
(38) 高橋隆三氏編『実隆公記』巻一ノ下（続群書類従完成会　昭和三四年三月）
(39) 大塚芳正氏編「愛知 徳川美術館」（『日本の国宝』八一　朝日新聞社　平成一〇年九月）、徳川美術館編『王朝の雅び千年』（徳川美術館　平成一六年一二月）等を参考。
(40) 注39に同じ。
(41) 今井卓爾氏他編『美の世界・雅びの継承』（『源氏物語講座』七巻　勉誠社　平成四年一二月）竹内順一氏「源氏物語と工芸」



① 少女　表紙

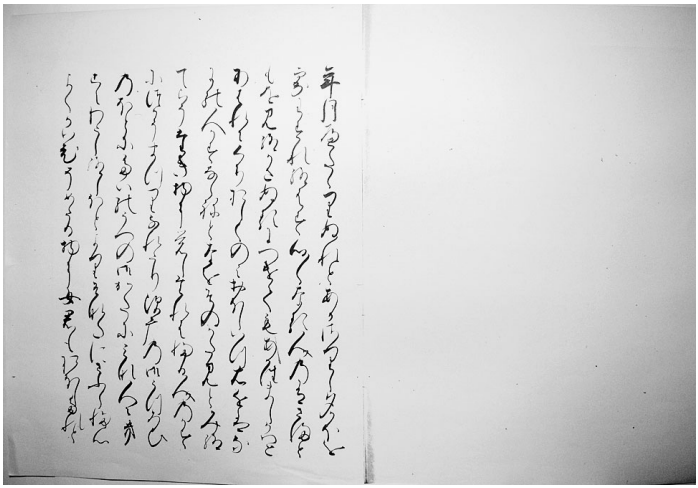


② 少女　１オ

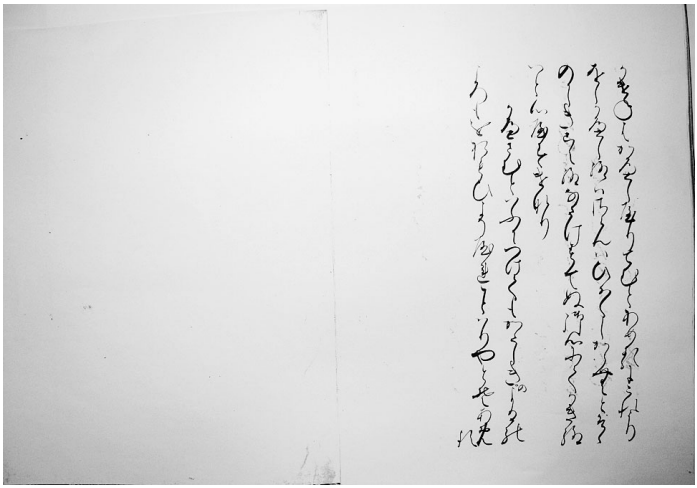


③　少女　終丁

④　玉髪　表紙

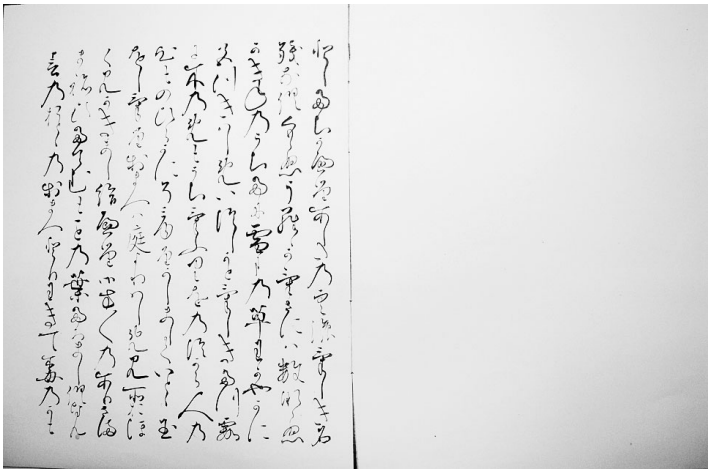


⑤　玉髪　１オ



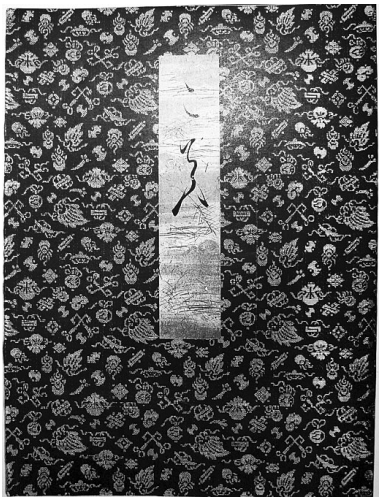
⑥　玉髪　終丁

⑦　初音　表紙

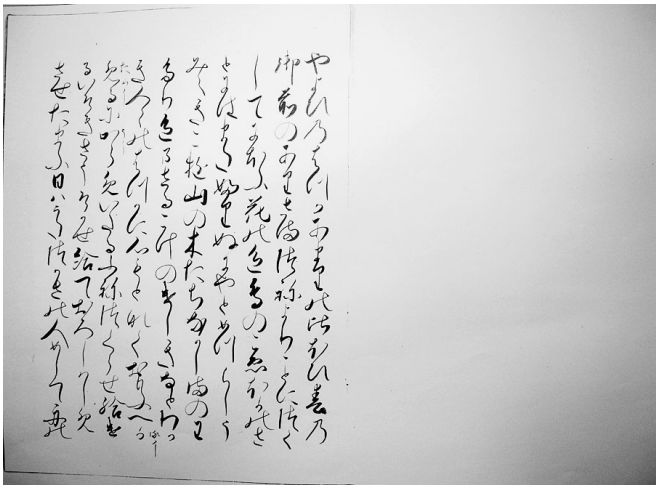


⑧　初音　１オ

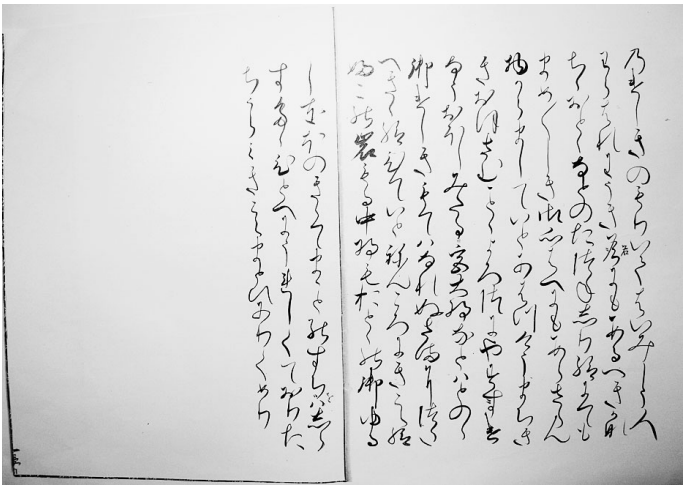
⑨　初音　終丁



⑩　胡蝶　表紙



⑪　胡蝶　１オ



⑫　胡蝶　終丁